
Dolphin Story

hiro2001

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dolphin Story

【Nコード】

N0270E

【作者名】

hiro2001

【あらすじ】

大学四年生の僕は、幼馴染の「サオリ」と偶然出会い、恋人の「ユキ」を大切に想いながらも、次第に心惹かれていく。飛び魚のアイチをくぐり抜けた先にある永遠の楽園には、一体何が待ち受けているのか……。強くも儂い僕ら三人のイルカたちが織り成す、不器用な成長の軌跡です。

それは四月のある晴れた日の夕方だった。僕は、よく行く海辺の公園から暮れゆく空と黄昏色に輝く海を見つめていた。海は今日も穏やかで、何より寡黙だった。そして、僕はその海と静かに向き合うのが好きだった。公園からは海の向こうに島影が見え、島と陸との間には橋がかかり、天気によければその橋の上に富士山のシルエツトを見ることができた。僕は、いつものそんな風景を眺めながら独りため息をつき、そして今までの自分を思い返してみた。

僕は都心の大学に通う四年生で、実家があるこの町から大学まで電車で一時間くらいかけて通っていた。取り立ててスポーツなどをすることもなく、大学でもサークルに少し顔を出す程度で、何かに一生懸命に打ち込んでいるわけでもなかった。何かをしていると言えば、地元のこの町で毎日のようにコンビニのバイトをしているくらいで、暇さえあればこの公園に来てただあてもなく海を眺めていた。海辺のこの町で育ったせいもあって海は好きだった。だから今日も僕は、ただひたすらに海を眺めていたのだ。

そうして一時間くらい過ぎただろうか、さすがに飽きてきたので家に帰ろうと振り返った時、僕はそこにいた一人の女の子に釘付けになった。彼女は首からイルカのネックレスをかけていて、よく見るとその瞳は涙で潤んでいた。僕はその姿にしばらく呆然としてしまったが、やがてはつとして彼女から目をそらした。彼女もこちらの視線に気づいたのか急にきびすを返して立ち去っていった。その間、一分だったかもしれないし一時間だったかもしれない。僕は時間の歪みの中で、必死に自分を取り戻そうとした。何かがひっかかっていた。彼女の姿の向こうに、僕は何かを見たのだ。でも、それが何だったのかわからなかった。僕はめぐり来る運命のようなものを感じながら、ただ一人歩き出した。

次の日僕は大学に顔を出し、砂漠に水をまいているような無意味な講義を聞き、その後久しぶりにサークルの仲間たちと昼飯を食べた。サークルと言うだけあって何かに真剣に取り組んでいるわけではなく、単に飲んで遊んでといった程度のも物だったが、よく合コンの話が舞い込んでくるので、たまに顔を出しては耳を傾けていた。その日もご多分に漏れず合コンの話が持ち込まれていたので、僕は二つ返事でオーケーし、メンバーについて聞いてみた。

「それがさ、俺の知っている女の子とその友達の合わせて三人なんだけど、みんな短大に入ったばかりの一年生なんだ。結構可愛いらしいぜ」

結構可愛いということは、結構怪しいことを意味していることを僕は経験上よく知っていたが、合コン自体が遊びのようなものなのであまり期待せずに週末を待った。

その日は朝からしとしとと雨が降り、僕は講義に出た後、少し買い物をしてから現地へ向かった。そこは少し気の利いた雰囲気のイタメシ屋で、僕が店の中に入ると、そこには知った顔と女の子たちが席に着いて最後に来た僕を待っていた。

「おい、遅せえよ！」

僕はみんなに軽く謝った後、あてがわれた席に座った。結構可愛い、と言っていた仲間の言葉に嘘はなかった。いや、それは合コンには珍しく、想像以上のメンバーだった。僕は、そのことに逆に戸惑いながら彼女たちを眺め、そこで一人の女の子に目を止めた。そう、それはあの日公園にいた子だった。僕は声を上げそうになる自分を必死に抑えた。それは、偶然というにはあまりにも偶然だったが、彼女はこちらには気づいていないようだったので僕は少しほっとした。

やがて合コンが始まり自己紹介となった。僕の番が来たので、いつものように自分の名前から性格や趣味など、お決まりのフレーズを並べた。案の定それはあまりぱっとしないものになったが、その

中で一人の女の子だけがこちらをじっと見つめていた。そう、あの子が僕のことをじっと見つめているのだ。僕はその視線に戸惑いながらも、少し気まずくて目をそらした。彼女はしばらくの間じっと僕を見つめていたが、やがてまた周りの話の輪に戻っていった。

そうして二時間くらいが過ぎただろうか、カラオケに行こうということになり、僕らは席を立ってまだ雨の止まない表へ出た。とその時、先程僕の方をじっと見ていたあの女の子がこちらの方へ駆け寄ってきた。

「もしかして、家は鎌倉ですか？」

「うん、そうだけど……」

と僕が答えたその瞬間、彼女の顔に満面の笑みが広がった。

「ヒロくんよね？ 会いたかった！」

彼女はそう言うと、急に僕に飛びついてきた。彼女の傘が道端にこぼれ落ち、僕らは雨の中で不意に抱き合うことになった。彼女の首筋からはほのかにミントの香りがした。僕は明らかに戸惑っていた。彼女は僕のことを知っているのに、僕は彼女のことを知らなかった。でもしばらく経つうちに、僕は遠い昔の古い記憶を蘇らせることに成功した。

それはもう十年近く前のことだった。僕はまだ小学六年生で、その日の朝も自分の部屋の窓から隣の家の部屋の窓を見ていた。やがて部屋のカーテンが開き、そこに見慣れた顔が現れた。

「ヒロくん、おはよう。今日もいい天気だね」

「ああ、まあね」

「何よ、その寝ぼけた顔は。早くしないと学校に遅れるよ」

「まったく、うるさいなあ」

彼女は隣に住んでいた小学三年生で、年下ではあったが昔からよく遊んだりしていて、言わば幼なじみのようなものだった。でもそんなある日、彼女が家の都合で引っ越すことになったので、僕は彼女にイルカのネックレスをプレゼントした。

「ありがとう。一生大事にするね」

「おおげさだなあ」

「ううん、私の大切な宝物よ」

あれから十年、まさかあの子がここにいるなんて……。

「ヒロくん、どうしたの？」

気がつくと、そこには彼女の、十八歳の女の子の顔があった。と同時に、二人で濡れに抱き合っている姿があった。周りの人々は、何事が起きたのかというような怪訝な目で僕らを見ていた。僕は彼女の腕をほどくと仲間に別れを告げ、彼女と二人で逃げるようにその場を離れた。

「濡れちゃったな。どこか入ろうか？」

「そうだね」

僕は近くの喫茶店に入り、窓際の席に座った。雨は小降りにはなったものの、まだしつとりと街角を濡らしていた。

「サオリが引っ越しちゃってから、もう十年になるよな？」

「そうかあ、もうそんなになるんだね。でもね、私また鎌倉で一人暮らし始めたのよ。何かあの頃が懐かしくて、もちろんヒロくんにも会いたかったしね」

彼女……サオリは、短大への入学を機に鎌倉に戻っていた。十年という歳月は、当然のように人を変えていく……今目の前にいるのはサオリではあったが、当然のように小学三年生のサオリではなかった。僕は時の流れの速さに戸惑い、また言いようのない切なさを感じたが、やがてそれも淡い記憶の彼方に消え去った。

「あつ、そう言えば何日か前、あの海辺の公園にいなかったか？」
「えっ、行ってないよ。またあ、人違いじゃないの？」

でも、サオリは明らかに嘘をついていた。たとえ十年が経ったとはいえ、僕にはサオリの癖がよくわかっていた。嘘をついた時に瞬きをするその癖が……でも何故嘘をついたのか、そして何故あの時泣いていたのかは、どれだけ考えてもわからなかった。

僕は考えるのを諦めると、気を取り直して再びサオリと話し始めた。昔遊んだ頃のことや引越してから今までのことを、僕は二人の記憶の溝を埋めるかのようにただひたすらに話し続けた。

気がつくとも終電の時間が近づいていたので、僕らは急いで店を出ると、そのまま脇目も振らずに駅へと走った。帰る方向は同じだったので、僕らは同じ電車の座席に向かい合って座った。終電はいつものように酒の匂いと人いきれで充満していたので、僕は耐え切れずに窓を開けて、夜露に濡れた空気を胸いっぱい吸い込んだ。雨はもうすっかり上がっていた。

「ヒロくんって、今彼女とかいるの？」

「今はいないよ」

「ふうん、そうなんだ。彼女いないんだ」

「俺ってモテないからなあ」

「そんなことないよ。ヒロくん、とつても素敵だよ」

「ありがとな、お世辞でも嬉しいよ」

「ふうん、そんなんじゃない。私、本当は……」

「えっ？」

「ううん、何でもない」

サオリはそう言った後、急にうつむいて口をつぐんだ。サオリがその時何を言おうとしていたのか、僕にはうつすらと理解することができた。でも僕は、サオリの気持ちに伝えることはできなかった。何故なら、僕の中には既にある一人の女性の姿が宿っていたからだ。ふと窓の外を見ると、そこには本当にひたすらの暗闇が広がっていた。

やがて電車は鎌倉に着き、僕らはお互いに黙ったまま駅前のロータリーで別れた。サオリの家は駅から歩いて十分ほどの所だったので、僕は送って行くと言ったが、サオリはうつむいたまま黙って首を横に振った。僕はそんなサオリの後ろ姿を黙って見守りながら、深く長いため息をついた。今日起きたことを考えるには僕はあまりも動揺し、そしてその目まぐるしい展開に疲れていた。懐かしいサオリの顔に会えたことへの喜びと同時に、また何とも言いようのない戸惑いや切なさをも感じていた。僕はあれこれと考えるのを諦めてタクシーに乗り込んだ。江ノ電の終電は、とうの昔に発車してしまっていたからだ。

それから一週間ほど経ったある日の夕方、僕がコンビニでバイトをしていると店の扉が静かに開き、そこにサオリが立っていた。

「来ちゃった、えへへ」

「どうしてここがわかったんだ？」

「ヒロくん、忘れちゃったの？ この前一緒に帰った時、家の近くのコンビニで働いてるって言ってたじゃない。ほとんど毎日、夕方から夜までやってるって」

「そんなこと言ったか？」

「まったく、相変わらずなんだから」

「それで、今日は俺のこの格好いい顔を見に来たわけ？」

「まあ、格好いいは置いといて、今日バイト終わってから空いてる？」

「うーん、別に用はないけど」

「それじゃあ、ドライブに行かない？ 私、海が見える夜景見たかったんだ。ほら、ドリカムの歌にあったじゃない、星空が映る海へくっささ」

「誰の車で？」

「決まってるじゃない、ヒロくんのよ。まさか、ないわけじゃないわよね？」

「まったく何なんだか……まあいいけど、終わるまであと一時間くらいかかるぜ」

「オツケー、その辺のお店にでも入って待ってるわよ」

「お店って言ったって、その本屋とスーパーしかないぜ」

「上等じゃない」

サオリはそう言うと、足早に店を出て行った。僕は、自分の日常生活の中に突然入り込んできたこの訪問者に明らかかな違和感と不自然さを感じたが、同時にサオリとの時間が持てることに、内心の嬉

しさを抱いてもいた。そう、僕らは何もかもをわかり合える幼なじみだったのだ。

そして一時間後、サオリが店に戻ってきたところで、僕らは店を出て僕の家へと向かった。僕の手はあまりぱつとしないものだったが、サオリは結構気に入ったらしく助手席ではしゃいでいた。僕は、そんな姿を少し呆れた目で見ながら車を走らせた。海岸通りを西へ、僕らはこのあたりでは結構有名な海の見える高台へと向かった。高台へ続く沿道の桜は満開で、薄桃色の花びらが夜空をひらひらと舞っていた。サオリは一言も喋らずに、うっとりとした目で、ただひたすらにその姿を見つめ続けていた。

やがて目的地に着いたので、僕は車を駐車場へ止め、二人で高台の公園を歩いた。夜の公園にはそれなりに多くの人が出たが、その割には静かだった。サオリは僕の腕に自分の腕をからませて、時々僕の顔を見ながらもただ黙って歩いていた。十分ほど経ったところで目の前に大きな鉄塔が見えたので、僕らは海の見える場所へ歩を進めた。そこにはオレンジ色に光る町の灯りと車の流れ、そしてその向こうに夜の海の闇が広がっていた。それは男の僕でも感動してしまうほどの見事な夜景だった。

「わあ、綺麗……」

サオリはその言葉だけを言うと、目の前の夜景をじっと見つめていた。僕はその横顔を見ながら、改めて来てよかったと思った。と同時に、サオリに対して別の想いが過ぎったのもまた事実だった。それは妹を思いやる兄のような感情でもあり、またいつの間にか失くしてしまった淡い切なさでもあった。僕は、そんな自分の心の動きを敏感に感じながらもふと横を見た。そこには、そんな僕の表情をじっと見つめているサオリがいた。

「ねえ、ひとつ聞いていい？」

「何？」

「ヒロくんは、私のこと好き？」

その表情で言われた僕は、思わず言葉に詰まった。その『好き』

が、単なる『好き』でないことはわかっていた。サオリの言おうと
していることの全てを、僕ははつきりと理解することができた。で
も、僕はどう答えていいかわからず、ただ黙ってサオリの顔を見つ
めるしかなかった。確かにサオリとは昔から知っている仲で、言わ
ば幼なじみのようなものだったし、現に久しぶりに会ってから今ま
での中で、可愛いともいとおしいとも思っていた。でもそれは、正
直なところ女の子に対しての愛情とは違っていた。僕はただサオリ
を見つめることしかできずに、虚しい時間がひたすらに過ぎていっ
た。やがてサオリが静かに口を開くその時まで……。

「そうか、そうだよ。うんわかった」

「いや違うんだ、そうじゃなくて……」

「さあ、綺麗な夜景も見られたし、そろそろ帰ろうよ」

サオリは僕の言葉を遮るように足早に歩き出した。僕は少し後悔
しながらもサオリの後を追った。帰りの車の中でも、僕はほとんど
口をきかなかった。僕は何度も自分の気持ちを正直に言おうとし
たが、サオリと会えなくなることが怖くて、喉元でその言葉を押し
込めてしまった。海岸通りを東へ、やがてサオリがゆっくりと話し
始めた。

「ねえ、ドリカムが聞きたいな」

僕は黙って、CDをデッキに差し込んだ。やがて車内には、『星
空が映る海』が静かに流れ出した。サオリは今何を考えているのだ
ろう、僕にはその気持ちかわかっているのだろうか。対向車が照ら
すライトを浴びながら、僕の心はただあてもなく暗闇を彷徨ってい
た。

それから何日かが音もなく過ぎた。サオリからは何の連絡もなかった。僕は、昼間は大学、夜はコンビニのバイトといったあたりきりな日々を送り続けた。サオリのことは気にかかっていたが、かといってこちらから連絡をすることもなかった。正直なところ、何となく気まずかったのだ。そしてそんなある日の夜、僕はいつものようにコンビニのレジの前に佇んでいた。それほど多くの客は来なかったので何となくぼんやりとしていると、隣で一緒にバイトをしていた女の子が不意に僕に話しかけてきた。

「ねえ、この前来てた女の子って、マツダくんの彼女なの？」

彼女はユキといい、僕と同じ年で横浜の大学に通っていた。家はここから電車で二つ先の駅の近くにあり、両親と一緒に暮らしていた。いつも物静かな感じだったので、二人でバイトをしていても、ユキのほうから話しかけてくることはほとんどなかった。むしろ僕のほうが下らないことを言っ、ユキがいつも笑っているような感じだった。そんなユキが急に話しかけてきたので、僕は一瞬面食らった。

「いや、違うよ。小さい時からの幼なじみでさ、この間久しぶりに偶然会ったから、この店でバイトしてることを話したら急に訪ねて来たんだ」

「ふうん、そうなんだ」

「でも、どうしてそんなこと聞くんだった？」

「えっ、別に……」

そこで僕は、ユキの想いを反射的に受けとめ、思い切って誘いをかけてみた。そう、僕は前からユキのことが好きだったのだ。

「ところでさ、今度の日曜日空いてる？」

「ええ、空いてるけど」

「よかつたら、映画でも見に行かない？」

「えっ？」

「駄目かな？」

「うっん、いいけど……私でいいの？」

「当たり前じゃないか。ユキだから誘っているんだよ」

僕がそう言うとユキはにっこりと微笑んだ。僕はその笑顔に天使の姿を見たような気がして、いつになく胸が高鳴っていた。

そして日曜日、僕らは鎌倉の駅で待ち合わせてから横浜に向かい、手始めにユキが見たがっていた映画を見た。それは予想に反したホラー映画で僕は少なからず驚いたが、それでも最後まで何とか見続けると、その後近くのオープンカフェで口当たりのいいコーヒーを飲んだ。

「でも、ユキがホラー好きだとは思っても見なかったよ」

「マツダくん、嫌いだった？」

「いや嫌いじゃないけど、何か意外でさ」

「そう？」

「ほら、俺なんかと違っていつも静かだからさ、何か恋愛ものとかのほうが好きなのかなって」

「そういうのも見るけど、今日みたいなほうが好きよ。ただ、友達とか一緒に見てくれなくて」

「確かにそうかもな」

「この映画、どうしても見たかったのよ。迷惑だった？」

「いや、結構面白かったぜ」

「……」

「どうしたの？」

「マツダくんって、優しいのね」

「そうかな」

「きつと、女の子にもモテるでしょ？」

「ああ、もうモテ過ぎちゃって大変だぜ」

僕その言葉に、ユキは静かな微笑みを浮かべながら目の前の光

景を眺めていた。そろそろ夕暮れが近く、街は少しずつ黄昏色に染まり始めていた。そして僕は、そんなユキの横顔に思わず見とれてしまっていた。

「ねえ、どうしたの？」

「あつ、いや別に……なあ、海見に行かないか？」

僕は慌ててユキを促すと、店を出て海のほうへと舗道を歩いた。そう、僕は今自分の気持ちを否応なく感じていた。そしてそれは、海に近づくにつれてよりはっきりとした形となって僕の心の中に現れていた。僕はユキのことがたまらなく好きだった。何よりも、そして誰よりも……。

海沿いの公園には人も多く、僕らは偶然に空いていたベンチに座り、暮れゆく空にかかる白い橋を見ていた。

「私、海を眺めると、嫌なことを全部忘れるの。だから、辛いことや悲しいことがあると、家の近くの砂浜に座ってじっと海を見つめるの。海と話をするの」

「俺もそうだよ。家の近くの公園から、毎日のように海を見るんだ」

ユキは、ただ黙って下を向いていた。

「私たちって、とても似てるわね」

「似ているなら俺たち……」

「えっ？」

「俺たち、付き合えるよな？」

僕のその問いかけに、ユキは言葉の代わりにゆっくりと首を縦に振った。僕はそんなユキの姿がとてもいとおしくて、彼女の肩をそっと抱き寄せると静かに唇を重ね合わせた。ユキは少し体を震わせたが、やがて僕の体にその身を寄せた。それは本当に偶然で自然な出来事だったが、僕はその時、自分でも驚くほど素直に気持ちを表現できた。サオリの時とは明らかに違う気持ちを……。

どれくらいの時間が過ぎただろう、ユキはそつと唇を外すと、僕のほつをじつと見て呟いた。

「ねえ、海の声が聞こえない？」

「えっ？」

「とても静かなの。でも爽やかで優しく、私を温かく包んでくれるの」

「そうか」

「ねえ、何を考えてるの？」

「別に、何も考えてないよ」

「ふうん」

ユキはそう言うと、そつと僕の胸に顔をうずめた。でも僕は嘘をついていた。僕は何も考えていないどころか、ユキとこうして二人でいることに心の安らぎとたとえようのない充足感を覚えていた。ただそれを言葉にすることはできなかった。言葉にすると、それが儚く消えてしまうように思えたのだ。

僕らは随分長い間そうしていたが、やがて夜のとばりが降り、あたりが闇に包まれるとユキは静かに顔を上げ、ライトアップされているほうを指差した。

「あれに乗りたいな」

それは海沿いに立つ観覧車だった。僕らはベンチから立ち上がると、肩を寄せ合いながらゆっくりと歩き出した。それは真下から見るととても大きくて僕は少し驚いたが、意外と並んでいる人も少なく、十分ほどで乗ることができた。僕らはそこに並んで座ると、目の前のライトアップされた港と、そこにかかる白い橋を眺めた。僕は自分の肩や頬に、ユキの柔らかな髪の毛の感触をはつきりと感じていた。そしてその優しい感触は、僕らの今の気持ちを象徴しているように思えた。

「綺麗ね」

そう言って振り向いたユキを、僕はそっと抱き寄せて互いの唇を確かめ合った。めくるめく時の中で、僕はその時確かに幸せの形を見ていた。

そうして僕らの付き合いは静かに始まった。普段の日は、バイトが終わった後に近くの海を見ながら話をし、週末になると映画を見たりドライブに行ったりした。僕にとってそれは本当にかげがえのない時間であり、と同時に生きていることの素晴らしさを実感できる瞬間でもあった。そう、僕はユキとの心の交わりの中に愛という名の柔らかい光を見ていたのだ。

そんなある日、僕の家我突然の電話がかかってきた。それはまぎれもなくサオリからのものだった。

「元気してた？」

「ああ、まあな」

「この前は、何かごめんね」

「いや、別に……」

サオリは僕の言葉を遮るように続けた。

「ところでさ、今度のゴールデンウィーク空いてる？」

「まあ、空いてる日もあるけど」

「実は、ちょっと付き合っしてほしい所があるの。いい？」

「まあ、いいけど」

「じゃあオツケーってことで、また電話するから。じゃあね」

「おい、ちょっと待てよ！」

電話は見事に切れていた。僕は突然のサオリの誘いに少し戸惑ったが、同時にほっとしてもいた。この間からの気まずい流れを何とかしたかったのだ。これでサオリとも仲直りできる……僕は結構楽しみにその日を待った。

その日はゴールデンウィークの真っ只中で、街中は人込みで溢れ返っていた。そして僕は、待ち合わせ場所の鎌倉の駅前で手を振りながらやって来るサオリを待ち受けていた。

「ごめん、待った?」

「まあ、ちよつとな」

「じゃあ行くつよ」

「おいおい、どこへ行くんだよ?」

「水族館よ」

僕は電車を乗り継いでそこへ向かった。正確に言うと水族館をメインにしたテーマパークで、イルカのショーからジェットコースターまでが同居している場所だった。

「私、一回来てみたかったんだ」

テーマパークに着くと、サオリははしゃぎながら水族館へ入っていった。僕は半ば呆れながらも、サオリのそんな姿に眩しさを感じながら後を追った。

「ねえ、ここつて魚が泳ぐ真ん中を歩けるのよね? 雑誌に書いてあったよ」

「いや、それは……」

それが子供騙し程度のものであることを僕は以前来て知っていたが、サオリの夢を壊すのも気が引けたので黙って後をついていった。案の定サオリは無然とした表情で文句を言ったが、すぐに気を取り直したらしく、イルカのショーを見ようと言った。

「私、イルカ大好きなんだ。ヒロくんは?」

「俺も好きだよ。どうせならイルカに乗りたい気分だな」

「私も乗りたいな」

「サオリが乗ったら、イルカが沈んじゃうんじゃないか?」

「それ、すっごいムカツク!」

僕はそうしてイルカのショーを見た。その後でジェットコースターにも乗り、ひとしきり遊び終わった頃には、もうあたりは夜の闇に完全に支配されていた。

「そろそろ帰るか？」

「まだまだこれからよ」

「もう夜になっちゃったぜ」

「ゴールデンウィーク中だけ花火が上がるのよ。ねえ、見ていこうよ」

僕は海沿いのデッキに座り、次々と水中から打ち上がる花火を眺めた。うつとりとした表情で見つめるサオリを横目に、僕はその神秘的な世界の中でその魅力を改めて感じていた。

「ねえ、これからもこうやって、一緒に遊んでくれる？」

「一緒についていても……」

「うつん、違うの。付き合うとかそういうんじゃないよ、友達として。やっぱり、私にとってヒロくんは大切な人だから」

「……ああ、いいよ」

「よかった。実は、もう会えないんじゃないかって、ちょっと心配だったんだ」

「昔からの仲だろ？」

「そうだよ」

サオリは本当に安心したようだった。そして、僕も心の底からほっとしていた。サオリとはこれからも幼なじみとして、いや友達として会いたかったからだ。

「ねえ、実は話したいことがあるんだ」

「何？」

「私、付き合ってる人がいるの」

「えっ？」

この唐突な一言に、僕は思わず言葉を失った。もちろん、サオリに男ができたとしてもそれはある意味では当たり前前で、取り立てて驚くことでもなかったが、この前のこともあったので何とな

く不意打ちにあったような感じがしたのだ。

「少し前に、短大の友達で紹介で知り合ったの。ひとつ上の大学二年生で、うん、優しい人」

「ふうん、そうなんだ」

「びっくりした？」

「ああ、ちよつとね」

「一応、ヒロくんには言っておきたかったんだ。大切な友達として」

僕は、次々に打ち上がる花火をただじつと眺めていた。確かに、サオリに対する気持ちは幼なじみの妹のようなものだったし、そんな彼女の幸せなのだからもつと喜ぶべきなのかもしれないが、そう思うには僕はまだある意味で幼かった。

「それで、ヒロくんのほうはどうなの？」

「まあ、一応はな」

「あ、彼女できたんだ」

「まあな」

「よかったじゃない。ねえ、どこの誰？」

「同じバイトで働いている女の子だよ」

「ふうん、ヒロくんも結構やるじゃない」

「それ、どういう意味だよ？」

「やっぱり、ヒロくんはモテるってことよ」

「そうかな」

「またとぼけちゃって。まあそこがいいところなんだけどね」

サオリはそう言うと、僕から視線を外してまた花火を見始めた。

僕は、今日ほど自分が子供だと思ったことはなかった。年下ながらサオリのほうか余程大人だった。と同時に、自分は本当に魅力があるのだろうかとも思った。見た目も平凡で、取り立てて何かに秀でているわけでもなく、何と言っても現実にそう実感したことがこれまで一度もなかったのだ。僕は夜空に打ち上がる花火をただあてもなく見つめながら、ふとそんなことを考えていた。

そうしてゴールデンウィークも終わり、僕は本格的に就職活動に入った。着慣れないスーツを着て回る会社訪問は正直かなり辛いものだったが、それでもバイトにはきちんと顔を出した。ユキとも順調に夜の海で静かな時を重ねながら、ゆっくりと、そして深くお互いの気持ちを確かめ合っていた。二人とも会社訪問で疲れていたが、毎日のそんな他愛もないひと時が、少なくとも僕にとっては唯一の救いだった。

サオリともよく会った。もともと大学が近かったので、僕らはよく昼飯を一緒に食べたり、時には二人で合コンを企画したりした。サオリの連れてくる女の子はどの子も可愛いかったので、僕は友達やサークルで随分有り難がられた。そして僕は、そんなサオリとの時間もまた、別の意味で大切に思っていた。

やがて街は七月の輝きに包まれるようになり、僕とユキは何とか会社の内定を取ることに成功した。もともと、僕の内定先は本当に引っかかった程度のもだったが、それでもあの辛い就職活動から解放されたことがとても嬉しかった。そんなある日、僕とサオリがいつものように大学の近くで昼飯を食べていると、サオリが急にある提案をしてきた。

「ねえ、ヒロくんもやっと就職が決まったことだし、夏休みに海にでも行かない？」

「海なら、家から歩いてすぐだろ？」

「違うわよ、もっと遠くの海よ。海外ってわけにはいかないけど、たとえば沖縄とか」

「沖縄に行くんだったら、グアムやサイパンのほうが安いぜ」

「そうねえ、じゃあ……まあ、どこでもいいわ。海で思いっきり遊ばない？」

「俺たち二人でか？」

「まさか、四人よ」

「あとの二人は？」

「ヒロくんの彼女と、私の彼」

「おいおい」

「いいじゃない。私、ヒロくんの彼女……ユキさん？ 一回見てみたかったんだ」

「でも、ユキが何て言うか」

「そこはヒロくんがうまく言ってさ、ねえ行こうよ」

サオリからのこの誘いが後々どんな影響を与えるのか、その時の僕には全く予期できなかった。ユキがこの誘いを受けるとは思えなかったが、それでも僕は、この旅行を楽しむために何とかユキを説得しようと思っていた。そう、その時の僕はユキのことなど全く考えずに、本当に自分のことしか見ていなかったのだ。レストラの窓の向こうに光り輝く七月の街並みを見ながら、僕はただそんな自分勝手な考えに翻弄されていた。

次の日の夜、バイトの帰りに僕はユキと近くの砂浜に佇み、昨日のサオリからの誘いを話した。案の定ユキの顔が曇ったが、僕はそれでも粘り強く誘ってみた。

「なあ、行こうよ。何だったら、向こうとは別行動でもいいんだし」

「ええ、でも……」

「車も別にしてさ、ただ一緒に行くっていう感じで。嫌だったら、話とかもしなくていいんだし」

「……そうね、わかったわ」

「オツケー、じゃあ決まりな」

「それで、どこに行くの？」

「それなんだよ。海って言ってもいろいろあるしさ」

「ねえ、伊豆なんかどう？ ちょっと近すぎるかもしれないけど、南のほうに行けば結構海も綺麗よ」

「そう言えば、サンドスキーができる砂浜があったな」

「そこって、確かドラマの舞台にもなってたわね」

「よし、じゃあそこにしよう」

「でも、勝手に決めちゃって大丈夫？」

「平気だよ。どうせ何も決まっていなかったんだから」

「でも、ヒロと泊まりがけの旅行なんてね」

「嫌か？」

「ううん、その逆。何かとっても楽しみ」

いつしか曇っていたユキの表情も明るくなっていった。僕はそんな姿をただ微笑ましく見つめ、そして楽しくなるであろう旅行に胸が高鳴った。

そして季節は真夏を迎え、僕らの旅行の日がやってきた。僕は荷物を車の中に放り込みユキの家へと向かった。ユキのことを考えて、サオリたちとは現地で待ち合わせることにしていた。ユキは家の前の石段に座って待っていたが、いつもとは違う夏らしい感じに僕は一瞬目を奪われた。

「おはよう」

「いい天気ね」

「ああ……ユキ、とても可愛いよ」

「何言ってるのよ、もう!」

ユキの白いワンピース姿は夏の日差しに輝いていて、僕は思わずユキをじっと見つめてしまった。

「何見てるのよ。早く行きましょう」

僕らは車に乗り込み、海岸通りを西へ向かった。八月の海は日差しを浴びてきらきらと輝き、僕らはFMから流れる音楽を聞きながら、ひたすらに車を走らせた。

やがて僕らは、待ち合わせ場所のホテルの前に着いた。サオリたちは早々と到着していて、こちらに向かって思い切り手を振っていた。

「遅いよー!」

「仕方がないだろ。道が混んでたんだから」

「三十分も待ったんだから」

でもサオリは怒っていなかった。いやそれどころか、こちらを見ながらあらん限りの笑顔を見せていた。

「あっ、自己紹介しなきゃね。そちらがユキさん？ はじめまして、サオリです」

「はじめまして、ユキです」

「あっ、それでこっちが私の彼、コウジっていうの。コウジ、こっ

ちが私の友達のヒロくん。そしてこちらがその彼女のユキさん」

「はじめまして、コウジです」

「どうも、ヒロです」

「はじめまして、ユキです」

「まあ、あいさつはこのくらいにして、さっそく泳ぎに行きましょうよ」

半ば啞然とする三人を誘うかのようになり、サオリは既に走り出していた。僕は少し呆れながらも、そんな後ろ姿を眩しく見つめていた。それは、これから始まる四人の夏物語を暗示するかのようになり、日差しが強く照り返している昼下がりの空だった。

僕ら四人は、海岸道路沿いの入口から砂浜へと駆け下りていった。サンドスキー場とは言っても、小ぢんまりとした砂浜の上のほうから急傾斜の砂の坂があるだけだったが、そこから見る海の色は確かに美しかった。それはちょうど隠れたプライベートビーチのような感じになっていて、波の音しか聞こえないような静かでいい雰囲気。の砂浜だった。

「これがサンドスキーやるところ？」

「まあいいじゃないか。海は綺麗だし、さあ泳ごうぜ！」

案の定文句を言うサオリを尻目に、僕らは見事なまでにマリンプールに染まる海で思い切り泳ぎ、体の中からすっきりとした気分になった。

「なっ、来てよかっただろ？」

「そうね、とても気持ちがいいわ」

その時僕とユキは、はしゃぎ続けるサオリたちから離れて砂浜に並んで座っていた。

「サオリさん、とても元気ね」

「まあ、昔から元気が取り柄だけのような子だったからな」

「でも、羨ましいわ。あんなに明るくて、私なんかとは正反対で…」

「サオリはサオリ、ユキはユキだよ。俺はそんなユキが大好きだよ」

その言葉に、顔を赤くしてうつむくユキの姿が、僕にはとてもいとおしかった。と同時に、明るくはしゃぎ回るサオリの姿にもまた新鮮な想いを抱いていた。

やがて夕方になり、僕らは心地よい疲れとともにホテルへ引き上げた。そこは海を臨む高台にあり、部屋の窓からは、黄昏色に染まる海が映画のスクリーンのように広がっていた。サオリたちと僕らは部屋を別々に取り、僕の隣にはそんな風景をうっとりとした目で眺めるユキがいた。

「綺麗ね」

「ああ、そうだな」

「私、今とても幸せよ」

「ユキ……」

僕はこちらを向いたユキを抱き寄せて、その潤んだ唇に近づいていった。とその時、突然部屋の扉が開いて、サオリが勢いよく中に入ってきた。

「ねえ夕食が終わったら花火でも……あっ」

「おいつ、部屋に入る時はノックぐらいしろよ」

「ごめんね……じゃあまた後で」

サオリは気まずそうに自分の部屋へと戻っていった。そして、僕はそんなサオリの姿にその想いをかすかに感じ取っていた。

そして夕食後、僕らは昼間泳いだ砂浜で花火をした。花火とは言ってもコンビニで買ってきたものだったが、僕らはそれでもとても楽しかった。特にサオリは、ロケット花火を振り回しながら僕ら三人を追いかけ回した。僕は少し落ち着いたところで、隣に座っていたコウジに聞いてみた。

「なあ、あれじゃあ毎日大変だろ？」

「いえ、いつもはこうじゃないんですよ。もっと静かですよ。ここへ来てから急にはしゃぎ出して、何かこっちがびっくりですよ」

「へえ、いつもは違うんだ」

ロケット花火でユキを追いかけているサオリを見ながら、僕は何

だか不思議な気分になっていた。僕がまだ見たこともない、サオリの別の姿があると知って……。

翌日も僕ら四人はその海で遊んだ。相変わらずサオリの行動に他の三人が振り回されているのは同じだったが、それでも僕は楽しかった。全てが開放的で爽やかで、そして海風が全てを包み込んでくれている……僕はこの瞬間、本当に日常を忘れていた。

「サオリ、そんなにはしゃいで疲れない？」

その時、コウジとユキは買出しに行っていて、砂浜には僕とサオリしかいなかった。

「ううん、全然。だってすごく楽しいもの」

「昨日コウジくんに聞いたんだけど、いつもはもっと静かだって、驚いてたぜ」

「だって、海に来てるのよ、大好きな海に。それに……」

「それに？」

「私、ヒロくんといると何か嬉しいの。何て言ってもいいかわからないけど、私らしくいられるっていうか……」

サオリは次の言葉に詰まったが、僕は我慢強くその続きを待った。

「私、今でも時々思うんだ。あの時、ヒロちゃんと付き合ってたなら、どうなってたのかなって。今さら考えても仕方がないのにね」

僕は完全に言葉を失っていた。と同時に今までとは違う、サオリへの気持ちが湧き起こっていることに気づいた。それはまだ本当に小さなものだったが、僕の心を確実に揺さぶっていた。きらきらと輝く八月の海を見ながら、僕はその心のさざ波をしつかりと感じていた。

そして最後の夜になり、僕ら四人はビールやジュースを片手に二日間遊んだ砂浜に佇んで、静かにささやく波の音を聞いていた。

「明日はもう帰りなんて、本当につまらないね」

サオリがジュースを飲みながら残念そうに言った。

「まあ、楽しい時ほどすぐに終わっちゃうしな」

僕はビールを少し飲んで言った。

「一ヶ月くらいいらればいいのにな」

「そんなにいたら逆に疲れるだろ」

「結構楽しいかもよ」

ユキが割って入ってきた。

「ほら、さすがユキさんね。ヒロくんの彼女にしておくのはもったいないわ」

「おいおい」

コウジが窘めると、サオリは少し舌を出しておどけて見せた。

「まあ、この海とも今日でお別れだし、今夜はぱあっといきますか？」

僕がそう言うと、突然思いついたようにサオリがある提案をした。

「ねえ、せっかくここに来たんだから、サンドスキーやらない？」

「いいけど、そりはどうするの？」

ユキのその問いにはさすがのサオリも口をつぐんだが、コウジの一言がそこに光を与えた。

「あそこにダンボールが……」

見ると、波打ち際にダンボールが打ち上げられていたので、僕らはそれを使うことにした。

「じゃあ、二組に分かれて競争しない？」

「それいいな」

サオリの言葉に僕も同調し、四人でじゃんけんをした結果、僕と

サオリ、そしてコウジとユキで組むことになった。

「ヒロくん、頑張ろうね」

「よっしゃ！」

僕とサオリは妙な闘志をみなぎらせて、コウジたちとともに坂の上のほうへ歩いた。

「よいい、スタート！」

僕の合図で、二組のそりならぬダンボールは砂の急斜面を一気に滑り出した。

「ヤッホー！」

「きゃあっ！」

僕らは、奇妙な叫びを夜空に響かせながら滑り降りていった。二組のダンボールは抜きつ抜かれつを繰り返したが、一番下に着いた時にはほとんど同時だった。僕らは笑いながらそのまま浜辺に寝転がり、去り行く夏を惜しみながら頭上に輝く星たちを眺めた。そして、その星空の中にユキとサオリを見たような気がした僕は、それでも必死にサオリの輝きを消そうとしていた。

それから何ヶ月かが足早に過ぎ去った。僕とユキは、今までと同じように近くの砂浜で時を重ねていた。ユキは僕の話聞きながら時には黙って笑い、また時には優しく慰めてくれた。時々ふと見せる悲しげな表情を除いては、何もかもがいつも通りだった。と同時に、僕はサオリとも今まで通り会い、たまに遊びに行ったりしていた。そして、そんな時に見せるサオリの何気ない表情や仕草に少しずつ惹かれていく自分に戸惑いながらも、ただ時に流され続けていた。でもそんな日々が長く続くはずもなく、冬の到来と時を同じくして、僕とユキはある方向へと静かに流されていくことになった。

既に季節はその装いを新たにし、僕はユキと一緒に十二月の夜の海岸を歩いてきた。そう、それは僕らがいくつもの時を重ねてきた砂浜だった。真冬の海岸はとても寒く、僕とユキはコートの襟を立てて厳しい海風に耐えていた。

「寒いな。どこか入ろうか？」

「うん」

僕らは海岸通り沿いにある、公園のすぐそばの喫茶店に入った。

店員が来たので、僕はコーヒーを、ユキはミルクティーを注文した。「もう冬になったのね。夏に海に行った時のことが、ほんの昨日のことのように感じるけど」

ユキは遠い目を窓の外に向けて呟いた。外は暗闇に覆われていて、かすかに打ち寄せる波の音だけが響いていた。

「ところで、今度のクリスマスイブ、どうする？」

「そうねえ」

「どこか行こうか？」

「うん……いいけど」

「どうしたんだ？ 何だか元気ないみたいだけど」

「そんなことないわ。いつもと同じよ」

コーヒーとミルクティーが運ばれてきたので、僕はコーヒーを少し飲んで次の言葉を探そうとしたが、それは虚しく空を切った。ユキは確かに、いつもと違って沈んでいるように見えた。いや、振り返ってみればそれは今日に限ったことではなく、ここ二、三ヶ月の間僕がユキに対して感じ続けていたことだった。僕は、今のこの重い空気を振り払おうとユキに向かって話し続けた。

「横浜行こうか？ 映画見て、飯食ってさ」

「……うん」

ユキは、注文したミルクティーを一口も飲まずにただうつむいて

いた。結局その夜は、そのまま一言も口を交わさずに僕らは別れたが、僕は家に帰る道すがら、最近のユキの態度の中にある何かをかすかだがはつきりと感じていた。そう、ユキから話を聞くまでもなく、その原因は明らかに僕にあったのだ。でも僕は、そのことを聞くのが怖かった。ユキに自分の想いを悟られていることを理解しなくなかったのだ。でも、そんな僕の気持ちとは裏腹に、その日はしっかりと音を立ててやってきた。

クリスマスイブのその日は朝から鉛色の雲が広がり、今にも雪が降り出しそうな寒い日だった。僕は鎌倉の駅でユキと待ち合わせる、そのまま電車で横浜へ向かった。予想に反してユキは表情も明るく元気だったので、僕はその姿に安堵し、最初に長編の恋愛映画を見た。ホラー映画にしようかと言う僕に、ユキは、今日はこれがいいときかなかったのだ。ユキは時折涙を浮かべながら、その三時間にも及ぶ大作を食い入るように見続けた。僕はそんなユキを横目で見ながら、明るさの中に垣間見えるユキの細かな表情の変化に戸惑い、来るべき何かを直感していた。その後の夕食の間も、ユキはまるで堰を切ったように話し続けた。そんなユキを見るのは初めてだったので、僕は少し面食らいながらもいつもとは違うユキを改めて感じていた。

「ねえ、海見に行かない？」

「そうだな」

食後のコーヒーを飲んでいる時にユキがそう言ったので、僕らはその店を出て二人で並んで歩き出した。今までの元気が嘘のようにユキはずっと下を向いたままだった。

やがて丘の上にある港が一望できる公園に着いたので、僕らは海にかかる橋の見える所まで歩き、そして自然に立ち止まった。

「寒い？」

「うん、少し……」

ユキは子羊のようにかすかに震えていた。僕は、自分のコートを

ユキに掛けようとしたが、ユキは静かにそれを振り払い、そしてゆつくりと首を横に振った。

「ねえ、ひとつ聞いていい？」

「何？」

「ヒロ、他に好きな人がいるんじゃない？」

少しずつ雪が降り始めた公園の中に、ユキのその一言が静かに響き渡った。僕は反射的に言葉に詰まったが、次の瞬間何とか言葉を押し出すことに成功した。

「……いるわけじゃないか」

「嘘……つかなくてもいいのよ。私、わかってた。夏に海に行った時から、ヒロの心が私のところから離れて、他の人のところへいつてることを……私、わかってた。ねえ、嘘つかなくてもいいのよ。サオリさんのこと、好きなんですよ？」

ユキは僕の目をじっと見つめながらそう言った。その頬に、ひらひらと雪が舞い降りては溶けていった。

僕は完全に言葉を失っていた。と同時に、頭の中が降りしきる雪のように真っ白になっていた。もう何も言えなかった。ユキの言うとおり、僕はサオリのことが好きだった。そう今となっては、ユキへの想いよりサオリへの想いのほうが強くなっていた。そして、そのことを全てユキに見透かされていた。

「はつきりと答えてよ、俺はユキよりサオリのほうが好きだって。

ねえ、はつきりと答えてよ！」

ユキの声が公園じゅうに切なく響き渡った。そして僕は、その答えにただ頷くことしかできなかった。

「……大嫌い！」

ユキはそう大声で叫ぶと、次の瞬間僕の頬に平手打ちを浴びせ、雪の中を走り去っていった。僕はその場に呆然と立ち尽くし、ユキに叩かれた自分の頬に手を当てていた。頬の痛みが自分の心の痛みとオーバラップし、やがて僕は、顔を両手で覆いながらうめくように泣き崩れた。それはまぎれもなく僕の心の叫びだった。ひらひ

らと舞い落ちる雪は、それでも天使のように僕を優しく包んでくれたが、ユキを失ってしまった心の痛みは決して癒されることがなかった。

次の日の夕方、僕がバイトに行くと、シフト表の中のユキの名前が消されていた。

「ああ、ユキか。今朝電話があつて、急にバイトをやめたいって言ってきたんだ。いい子だったんだけどな」

店長がぼつりとつぶやいた。そう、ユキは僕の前から完全に姿を消してしまつたのだ。僕はユキの心を鈍いナイフで、ゆっくりと時間をかけて切り裂いていつたのだ。そしてそこから溢れ出たユキの心の血は、今僕の心を鮮やかに染めていた。僕は今日のバイトを早退すると、よく行く海辺の公園で声を上げながら泣いた。ユキの心の血が僕の心を締め上げ、僕はそれから何時間も泣き続けた。どれだけ泣いたところで、どれだけ後悔したところで、絶対に許されることがないことをわかつていたのに……。

それから何日間かのことを、僕はほとんど覚えていない。バイトや遊びなどには一切行かずに自分の部屋に閉じこもり、ただあてのない時間を過ごした。何がどうしてそうなつたのか、めくるめく時の中で、僕は自分の気持ちをまだ掴めないでいた。今すぐユキの家に行つて話をしようとも思ったが、僕はそうすることを最初から諦めていた。一体今さら何を言えばいいのか、僕には皆目検討がつかなかったからだ。その時の気持ちでは、やはりユキとやり直そうとは思えなかつたのだ。

「ヤッホー、元気してた？」

それは、そんなある日にかかつてきたサオリからの電話だった。

「ああ」

「どうしたの？ 元気ないみたいだけど。まあそれはいいわ。ねえ、お正月に初日の出見に行かない？ また四人でさ、ユキさんにも言つてよ」

「それは……無理だよ」

「どうして？ ああ、わかった！ 二人きりでどこかに行くんでしょ？ ねえ、どこに行くの？」

「……別れたんだ」

「えっ？」

「ユキとは別れたんだ」

僕のその言葉の後、電話は死んだように静かだった。サオリの呼吸まで聞こえてきそうだった。

「……どうして？」

「俺がいけないんだ。俺が……」

「ちよつと待つて、ねえこれから会える？」

「えっ？」

「一時間後にそつちへ行くわ。ちゃんと待つててよ」

そうして電話は切れた。僕は、今自分で言った言葉さえ理解できないでいた。ユキと別れた事実があまりにも大きかったので、ほんの一握りの言葉では言い表しきれないような気がしたからだ。

それからちよつと一時間後に、サオリは僕の家に来てきた。余程急いだらしく、髪の毛はほつれ気味で化粧もしていなかった。

「ねえ、大丈夫？」

「ああ、まあな」

「とにかく、行きましょう」

僕らは海辺の公園へ向かって歩き、そして向かいの喫茶店に入った。そう、何週間か前の夜にユキと入ったあの店だ。店員が来たので、僕はコーヒー、サオリはミルクティーを頼んだ。サオリの顔がユキと重なり、僕の心は再びきつく締め付けられた。

「ねえ、ユキさんと何があったの？」

「ああ、まあいろいろと……」

「まあ、男と女のことだし、あまり詮索はしないけど、ヒロくんは、自分が悪いと思ってるのね？」

「ああ、俺が悪いんだ。俺が他の……」

「待つて、それ以上言わなくてもいいわ。私も恋愛経験あまりないし、難しいことはよくわからないけど、たとえ自分のほうが悪かったとしても、今は別れてしまったとしても、二人で過ごした時間は絶対だと思ふの。そして、その時間は永遠なのよ。だから、その永遠を胸に抱きながら、これから生きればいいんじゃないかしら？ 生意気なようだけど私、ヒロくんにはこれからを見つめてほしいな」

サオリはそう言うと、運ばれてきたミルクティーを一口飲んだ。

「これから生きる……か、そうかもな。うん、何か元気が出てきた」

「そうよ、また新しい出会いもあるわ。何なら私の友達を紹介するわよ」

「まだいいよ。でも不思議だな、サオリに慰められるなんて」

「結構役に立つのよ、私つて」

僕はサオリと話していて、少しずつ胸の痛みが取れていくような感じを受けた。と同時に、サオリに対する想いがより一層強くなっていくのをその胸に強く感じてもいた。でも僕には、サオリに対してそう口には出せなかった。ユキに対する整理のつかない想いもあったが、それよりも自分の気持ちがサオリに拒絶されるのが怖かったのだ。

サオリとは、その後三十分ほど話してから別れた。そして僕は、その複雑な想いを胸に抱えながら切なく年を越した。ユキへの想いは、僕自身の予想に反して一向に弱まる気配を見せなかったが、それ以上にサオリへの想いが急激に深まっていくことに僕は内心戸惑い、そしてそんな優柔不断で弱い自分の気持ちに情けなさを感じていた。でも結局のところ、僕は無意識のうちに、いやむしる意識的にその強い流れを自分自身で作っていったのだ。

そんな年も改まった二月のある日、僕は再びサオリからの電話を取ることにした。

「ねえ、今度のバレンタイン空いてる？」

「空いてるけど、でもコウジくんと会うんだろ？」

「何か、向こうが用事あるみたいで」

「それで、俺がピンチヒッター？」

「そんなことないけど……」

いつもとは違う少し沈んだ声が聞き取れたので、僕は反射的に言葉を変えた。

「わかった、どこか行こうか？」

「うん、私ドライブに行きたい」

「よし、じゃあ決まりな。俺が車で迎えに行くから家で待ってるよ」「うん、わかった。じゃあ十四日ね」

サオリの声が少し明るさを取り戻していたので、僕は安心して電話を切った。サオリはきつと悩んでいる……僕はその悩みが何であるか見当がついていたが、それに対してどう答えるか正直なところ迷っていた。ただ単にサオリを励ますべきか、それとも自分自身の気持ち思い切って打ち明けるべきか、僕は最後までその結論を出せずにいた。

その日は朝からどんよりとした雲が広がっていたが雨が降る気配はなく、僕は午後三時過ぎにサオリのマンションの前に車を止めた。クラクションを三回鳴らすとサオリが窓から顔を出し、やがて足早に階段を下りてきた。

「よおっ！」

「今日も寒いね」

サオリはいつもより少し元気がないように見えたが、それでも僕

に精一杯の笑顔を見せた。僕はサオリを車に乗せると、湾岸線へ向かって車を走らせた。

「ねえ、どこに行くの？」

「とりあえず湾岸線を北上して、後は行ってのお楽しみってところかな」

「ふうん……あっそうそう、はいこれ」

「えっ、何？」

「チヨコレートよ」

「ありがとう、義理でも嬉しいよ」

「義理なんかじゃないわよ」

サオリはそう呟くと、寂しそうに静かに首を横に振ってから外の景色に目を向けた。僕はサオリのそんな仕草に胸が痛んだが、同時に自分自身の可能性を無意識のうちに予見してもいた。やがて、湾岸線を北へ走った車は都心に近い海にかかる橋を越え、伊豆の島への船が発着する栈橋にたどり着いた。僕らは車を降りると、ライトアップされた虹の橋の見える場所まで歩を進めた。

「綺麗ね」

サオリは、それだけを言うのと深くため息をついた。暗い海の向こうに広がるその橋の姿は、確かに神秘的なまでに美しかった。

「今日はありがとう。私、ヒロくんといると心が落ち着くの。何か安心できるっていうか……」

「何かあったのか？」

「実はね、コウジ、他に好きな子がいるみたいなの」

僕は、その言葉に正直なところ驚いた。コウジとうまくいっていないことには察しがついていたが、まさかそんなことになっていようとは……二月の冷たい海風が、サオリのコートを静かに揺らしていた。

「そう……なんだ」

僕にはそう言うのがやっとだった。そして続きの言葉を探してみたら、ほんのかけらも思い浮かばなかった。

「だから私たち、もう駄目かもしれない」

「どうして、そのことがわかったんだ？」

「別に、これって言うことはないんだけど、彼の言葉遣いや態度から何となく感じるの。それに最近あまり会ってくれないし」

「たとえば、今日とか？」

「うん」

僕はその次の言葉に少し迷った。サオリへの想いを打ち明けるなら、コウジと別れるように言うべきだと思った。でも僕は、直感的にそれとは反対の言葉を口にしていった。

「俺、思うんだけどさ、本当に好きな人ができると、その人のことを強く思い信じようとするあまりに、かえってその人を疑っちゃうと思うんだ。本当に単なる用事なのに、他の女と会うんじゃないかとか、ちよっと素っ気ない態度を取られると、もう私に興味がないんじゃないかとかさ。コウジくんの言葉遣いや態度にしても、サオリの考え過ぎなのかもしれないし、要はそれだけコウジくんのが好きだったことじゃないのかな？」

「うん、そうかもしれないけど……」

「サオリは、コウジくんが好きなんだろ？」

「それが、わからないの」

「……えっ？」

「確かに、最初の頃は大好きだった。でも付き合っていくうちに、何かが少しずつ違ってきているように感じるの。うまく言えないけど、私はこの人のことを本当に好きなんだろうかって思い始めたの。それに……」

「それに？」

「私の気持ち、実はもう別のところにあるのかもしれないって」

「それって、他に好きな人がいるっていうことか？」

「わからない。ただ、ちよっと自分の気持ちを整理してみたいなって」

「そうか、まあ俺がどうこう言える立場にはないけど、サオリのや

りたいようにやればいいよ。たとえ結果がどうなってもさ」

「うん……ありがとう。やっぱりヒロくんって優しいな。今日は来てよかった」

「この間のお返しだよ」

「ねえ、私たちって、本当にわかりあえる友達なのかもしれないね」
「昔からの仲だからな」

「これからも、ずっと私の友達でいてね」

「ああ、もちろんさ」

「じゃあ、指きりしよ」

僕らは、夜空にかかる橋が見つめる中で固く指きりをした。それは僕にとって、サオリへの想いが叶わぬ、封じられたものになったかのように感じる儀式となった。でも僕は、一方で友達がそれ以上になる可能性を信じてもいた。そう、僕はサオリとのやりとりの中で、かなりはつきりとそのことを確信していたのだ。

それから一ヶ月が過ぎ、街は三月に足を踏み入れていった。サオリとはあれから連絡をとっていなかったし、まして会うこともなかった。僕の心の中では日増しにサオリへの想いが募っていき、それはこの一ヶ月の間にとめないものになっていた。そしてその想いを一刻も早く打ち明けるために、僕は躊躇せずにサオリに電話をかけた。そう、もうそこには弱く儂い自分はいなかった。

「もしもし、ヒロ فقط」

「どうしたの？」

「今日の日曜日、会えないか？」

「うん、いいけど」

「去年行った水族館に行こうぜ」

「うん、わかった。実はね、私も話したいことがあったんだ」

「じゃあ、ちようどよかったな。日曜日に車で迎えに行くよ」

「うん、じゃあ日曜日ね」

僕はサオリの話が気になりながらも、その胸の高鳴りを抑えることができずに、そのまま日曜日を迎えることになった。

その日は朝からすっきりとした青空が広がり、僕は約束どおりサオリのマンションへ車を走らせた。

「よおっ！」

「いい天気ね」

サオリは元気だった。いや、正確に言うと元気なふりをしていた。僕にはそのことがよくわかった。この一ヶ月の間に、明らかにサオリの身に何かがあったのだ。でも、僕はそのことには触れずにサオリを助手席に乗せると、去年二人で行った水族館のあるテーマパークへ向かった。

テーマパークは、春休みが始まった最初の日曜日とあって込み合

っていた。僕らは前と同じようにまず水族館に入り、それからイルカのショーを見た。サオリは以前来た時とは違い、はしゃぐこともなくただ黙って見続けていた。僕が声をかけても、少し微笑むだけでまた黙ってしまふ……そんなこともあって、僕はサオリに想いを打ち明けるタイミングを掴めないまま夕飯の時を迎えた。

「今日は元気ないな。何かあったのか？」

「うん……」

「何かあったって顔に書いてあるぜ。俺たち友達だろ？ 話してみなよ」

「実はね、コウジと別れたの」

「そうか。やっぱり他に女がいたのか？」

「わからないけど、多分いなかったと思う。でも、別れた理由は違うの。ヒロくんに言われてから、私よく考えてみたの。この一ヶ月間考えて考えて、それでわかったの。私が本当に好きな人は、コウジじゃないって……だから別れたの」

「それって……他に好きな男がいるってことか？」

サオリは言葉で答える代わりにただ黙って頷いた。僕は反射的にその男が自分であることに気づいたが、この期に及んでもそれを直接確かめることが怖かった。そう、僕は自分でも嫌になるほどの臆病者だった。

「それでその相手の男は、サオリのことをどう思ってるのかな？」

「仲のいい友達とは思ってくれてるみたいだけど」

「それで、告白するつもり？」

「でも勇気がなくて」

注文したパスタをフォークで丸め続けるサオリを見ながら、僕は早く打ち明けなければとただ焦るばかりで、頭の中が真っ白になってしまっていた。

結局その場ではそれ以上の話の進展はなく、夜も遅くなってきたので僕は帰ることにした。僕はいつまでも打ち明けられない自分に本当にうんざりしたが、それでも最後のチャンスを求めて、テーマパークから少し離れた海辺の公園に車を止めた。そこには人工の砂浜があり、海の間にはライトアップされたテーマパークが虹色に輝いていた。僕は静かに波の音を聞きながら砂浜を歩き、いつしか立ち止まったサオリに向かって僕は思い切って尋ねた。

「なあ、ひとつ聞いてもいいか？」

「何？」

「俺たち、仲のいい友達だよな？」

サオリはただ黙って頷いた。

「俺たち、友達以上にはなれないのかな？」

サオリは僕のその言葉にふと顔を上げ、僕のほうを見て首を強く横に振った。

「俺、サオリのことが好きだよ」

サオリは僕のほうをじつと見たまま、しばらくの間凍りついたように動かなかつた。そしてそのままの状態がどれくらい続いたかどうか、サオリはその目に涙をためて呟いた。

「……嬉しい」

僕はそんなサオリがどうしようもなくいとおしくなり、彼女を強く抱き締めた。僕のサオリへの想いの分だけ、ありつたけの気持ち胸に、僕はただひたすらに抱き続けた。そして、ふと顔を上げて静かに目を閉じたサオリの潤んだ唇に、そっと自分の唇を重ね合わせた。強く、そして深く、僕らは時の流れが止まってしまふほどの口づけを交わした。

どれだけの時間が過ぎただろうか、奇妙に歪んだ時の流れの中で、僕はサオリの唇から自分の唇を外すとその髪を優しくかき上げた。

サオリは恥ずかしそうにうつむき、それから僕の胸に顔をうずめた。
「ねえ、今何考えてる？」

「幸せだなんて。サオリは？」

「私も……だって、小さい頃からずっとヒロのことが好きだったのよ。あの頃私、ヒロのお嫁さんになろうと思ってたもの」

「へえ、そうだったんだ」

「だから、私が引越して二人が離れ離れになる時、すごく悲しくてわんわん泣いちゃった。でも、ヒロからイルカのネックレスもらってすごく嬉しくて、一生大事にしようと思ったの。本当よ」

「わかってるよ」

「それでね、実は高校三年生の時、好きな人ができたの。同級生だったんだけど、半年くらい付き合ったの。でも、卒業と同時に別れちゃって……それで、その時すごくヒロに会いたくなったの。ちょうど東京の短大に行くことが決まってたし、鎌倉に住めばヒロに会えると思ったの。それで……」

「それで、あの日あの公園にいたんだね」

「ヒロ、あそこが好きなこと知ってたから」

「あの時俺、すぐそばにいたんだぜ。わからなかった？」

「何となく暗かったし、まさかいるとは思わなかったし」

「でも、だったらどうして、あの合コンの時に言ってくれなかったんだ？」

「恥ずかしかったの。まさか、ヒロを待ってたなんて言えなかったの」

サオリは恥ずかしそうに僕のほうを見てからまたうつむいた。

「でもね、あの時ヒロとまた会っている話して、ああやっぱこの人のことが好きなんだなって思ったの。だから……」

「あの時はごめん。俺、何て言っただけいいかわからなくて」

「ううん、いいの。あの時は……うん、いいの。それでね、私新しい恋をしようって思ったの。だから友達で紹介で……」

「コウジさんと付き合ったんだね？」

「コウジ、優しくとてもいい人だった。私にはもつたいないくらい……だからとても幸せだった。でもね、ヒロと会っている時のほうがいいの。私らしくいられるっていうか、うまく言えないけど、とにかく楽しいの。特にあの夏の、ほら伊豆に行ったじゃない？あの時に実感したの。ヒロと一緒にいたいなって」

「俺もだよ」

「えっ？」

「正直あの夏までは、サオリのことを妹みたいに思ってた。でも、あの旅行から変わり始めたんだ。俺も、サオリのが好きなんじゃないかってね」

「ふうん……ちょっと意外だけど、でもよかった。二人とも同じ気持ちで」

そう言って、こちらを見つめるサオリの額に軽く口づけた僕は、それから彼女をゆっくりと抱き締めた。静かに打ち寄せる波音をバツクに、僕らの夜はただ果てしなく続いた。

そうして僕らは四月を迎えた。偶然とはいえ、思えば一年前の、あの海辺の公園での再会から全ては始まったのだ。いろいろなことがあったけれど、僕はこの時、本当の幸せというものを胸に抱きながら社会人になっていたのかもしれない。僕は、都心にある会社に就職し勤め始めた。そこは通信事業を扱う中小企業だったが、将来性のある有望な会社だった……と、少なくとも社長はそう言っていた。実家から一時間程度で通えることもあって、僕は一人暮らしをしないことにした。一人で暮らすと結構金もかかるし、正直給料が本当に安かったからだ。何年か勤めてからでもいいだろうと気楽に思っていた。サオリは短大の二年生になり、短大と僕の会社が近かったこともあって、僕らは一緒に昼飯や夕飯を食べたりした。今度はサオリのほうが就職活動をしていて、新入社員で残業の多い僕となかなか会う時間が取れなかったが、それでも僅かの時間を惜しむように、僕らはそのかけがえない瞬間を大切に共有した。眠れない夜にふとユキのことを考えることもあったが、その時は何にも増してサオリへの想いが強かったこともあり、その淡い想いは次第に記憶の彼方に遠ざかっていった。

やがて月日は流れ、街は真夏の彩りに染められていった。サオリは何とか会社の内定を取り、僕も休暇を取ることができたので、僕らは思い切って沖縄に行くことにした。そして七月も終わろうかというその日、二人は青い海が光り輝く南国の空の下にいた。

「わあっ、すごい！」

サオリはホテルの近くにある真っ白な砂浜を走り、服のままマリンスプルの海に足を踏み入れた。

「ねえ、ヒロもおいでよ！」

そう言って笑ってはしゃぐサオリの姿に、僕は確かに夏を、そし

てサオリへの愛しさをもまた感じていた。煌く太陽は、そんな僕らを歓迎するかのように光り輝いていた。

そして夜、僕はホテルの部屋の窓辺に佇み、そこから暗闇に染まる海を眺めていた。

「私、時々不安になることがあるの」

「何が？」

「この幸せが一体いつまで続くのかなって。ひよっとしたら、急に終わっちゃうんじゃないかって」

「そんなことないさ」

サオリはそれでも静かに首を横に振った。

「でも、止まない雨がないうちに、終わらない恋もないような気がするの。人の気持ちって、強いけど儂いものなんじゃないかって」

「確かにそうかもしれない。終わらない恋なんかないかもしれないでも、それでいいんじゃないかな。だからこそ、人は限りある今を精一杯生きて、大好きな人を精一杯愛するんだから。いつこの幸せが終わってしまうのかを考えるより、今の幸せを精一杯感じればいいんじゃないかな。俺はサオリのことが大好きだし、今そのことを強く感じてるよ」

サオリは僕の腕に身を委ねて呟いた。

「やっぱり、ヒロと付き合ってたよかった」

「俺もだよ」

「ねえ、私たち、大きな海を泳ぐイルカみたいだと思わない？」

「イルカか……そうかもな」

「それで、二人で寄り添っていくつもの海を越えていくの。ねえ、それってとても素敵だと思わない？」

「そうだな」

「いつまでも、一緒にいようね」

「もちろんさ」

僕はサオリの髪を優しくかき上げ、それから静かに口づけをした。そう、この時の僕はこの甘く溶けるような夜が、そしてサオリとの

日々が永遠に続くことを願っていたのだ。

次の日、僕らはレンタカーを走らせて、メインビーチから少し離れた鄙びた小さな砂浜に向かった。そこはレトロティックで落ち着ける雰囲気の中で、僕らはその海でひとしきり泳いだ後、ジュースを飲みながら砂浜に寝転んで、照りつける太陽をその肌に思い切り感じていた。

「とってもいい雰囲気ね」

「俺、こういう海好きなんだ。ひと昔前の海水浴場って感じで落ち着けるし」

「そうね。メインビーチもいいけど、こういう雰囲気も悪くないわね」

「だろっ？」

僕らはそうして本当に静かな時間を過ごしていた。耳元では優しく風の歌が聞こえ、打ち寄せる波音と繊細なハーモニを奏でていた。ふと目を開けると、透き通るような青空にぼっかりとした夏の雲が浮かび、プリズムのように輝く太陽の光は強く、でも優しく僕らを包んでいた。そしてすぐ横には、それに負けないくらいに輝くサオリの姿があった。

「ねえ？」

不意に問いかけるサオリの声に、僕は急に我に返った。

「えっ？」

「キス……してもいい？」

僕らは青く広がる空の下、白く輝く砂浜の上でゆっくりと互いの唇を確かめ合った。僕はその唇にはっきりとサオリを感じ、また自分自身の揺るぎない想いをも感じていた。そう、その瞬間僕らは互いの唇を通じてその心をひとつにしたのだ。

それからの数日間を、僕らは夏の海風と波の音を聞きながら過ごした。僕は、この瞬間が永遠に続けばいいと思った。それはまぎれ

もなく、僕のこれまでの人生の中で最も満ち足りていた瞬間であり、生きていることを体感できた瞬間でもあった。サオリもまた、この真夏の楽園の風に包まれてとても輝いていた。僕はそんなサオリの姿を眩しく見つめ続け、心の底から求め続けた。

そして最後の日、シヨツピングをしたいとサオリが言ったので、僕らは那覇の街中に繰り出したが、夏休みの真っ只中というだけあって大通りは人の群れで溢れ返っていた。

「すごい人ね」

「それに暑いな」

「いいじゃない、夏なんだから」

「まあそうだけど」

「あっねえ、あれ見てよ。綺麗ね」

サオリが指差すその店のショーウィンドウには、銀色に輝くイルカのネックレスが飾られていた。

「あれ、お揃いで着きたいね」

「ああ、でも……」

その値段は何気なく買うにはあまりにも高かった。もしペアで買ったら、向こう三ヶ月間は生活に苦しみそうだった。でも、僕は迷うことなくそれを買った。何故だかわからなかったが、それが僕らにとつてとても大切な、二人の愛を象徴しているもののように思えたからだ。

「でも、本当に大丈夫？」

「まあ、これくらいはな」

「ありがとう、一生大事にするね。さっそく着けてみようよ。ヒロのは、私が着けてあげるね」

サオリはそう言うと、僕の首にそのネックレスをかけた。そして僕もサオリの首にかけた。二人の胸には銀色のイルカが夏の日差しを浴びてきらきらと輝き、僕はその眩しさに思わず目を細めた。それはまさに、変わらぬ二人の愛の産物のようだった。

そうして僕らの夏は、その幕を静かに下ろした。僕は仕事にサオリは大学に戻り、再び元通りの生活が始まった。程なく街は九月を迎え、夏のかからも日が経つにつれて、ひとつまたひとつと次第に消え去っていった。僕は、相変わらず毎日残業を繰り返していたのでサオリとはなかなか会えなくなっていたが、それでも少しでもサオリと会えるように精一杯の努力をした。おかげでかなり辛い毎日が続いたが、サオリと会えるだけで少なくとも僕の心は満たされていた。

そんなある日、職場の飲み会があり、僕は会社の人たちと新宿の居酒屋で席を同じくしていた。僕は、そういった会社関係の飲み会には少しうんざりしていたので、上司や先輩たちには注ぎに回らずに自分の席で一人で飲んでいた。すると隣に一人の女の子が座り、僕に向かって話しかけてきた。

「ねえ、どうしたの？ 何だか元気ないみたいだけど」

彼女はハルカという会社の同期の子で、職場でよく話をする気の合う女の子だった。

「そうかな？ いつもと同じだけど」

「いつもはみんなのところに注ぎに回ったりして、よく話してるじゃない。今日はじっとしてたから、どうしたのかなと思って」

「何かもう疲れちゃってさ。気遣って話し合わせて馬鹿やって、結局俺って何っていう感じがしてさ」

「まあ、会社の飲み会だから仕方ないわよ」

「今日は、ゆっくり飲ましてもらおうよ」

「よし、今日は私と飲もう。さあ、じゃんじゃんいくわよ」

元々ハルカは酒が強かったので、僕は数多くの話をしながらよく飲んだ。そんな風にハルカと話をしたのは初めてだったが、彼女の意外な一面を知ったりして、会社の飲み会にもかかわらず僕は結

構楽しんだ。

やがて会もお開きになり、僕は帰ろうと思ったが、ハル力がかなり酔っていたので家まで送ることにした。ハル力は新宿から少し離れた郊外に住んでいたのので、僕はタクシーを呼び止めて一緒に乗り込んだ。

「マツダくん、ごめんね」

「いいんだよ。俺も、ちょっと飲ませ過ぎたし」

「ううん、私が飲もうって言ったんだから」

「もういいから寝なよ。家に着いたら起こすから」

ハル力は静かに頷くと、そのまま深い眠りについたようだった。

やがてタクシーがハル力の住むマンションに着いたので、僕は彼女を起こすと、その体を抱えるようにしてマンションの階段を上った。ドアの前に立つと、ハル力はバッグから部屋のキーを出してドアノブに差し込んだ。ドアを開けると、そこには一人暮らしの真っ暗な部屋が顔を覗かせた。ハル力は明かりをつけると僕に部屋に入るよう勧めたが、僕は正直少し躊躇した。でも、ハル力をこの状態にしておくわけにもいかず、僕は恐る恐る部屋へ入った。そこは女の子の部屋にしては少し殺風景な感じもしたが、そんなことを考えるや否やハル力がある場に倒れ込んでしまったので、僕は慌てて彼女を抱き起こすとそのままベッドへと連れていった。

「マツダくん、ごめんね。コーヒーでも入れようと思ったんだけど」

「いいよ、気遣わなくて。今日はゆっくり休めよ。明日もあるんだから」

「うん、ありがとう」

「じゃあな、俺帰るから」

「待って」

ハル力のこの突然の言葉に僕は思わず立ち止まり、振り返って彼女を見た。

「何？」

「もう少し、もう少しだけここにいて」

「でも……」

「私、前から……マツダくんのこと、好きだったの」

僕は、その言葉にただ呆然と立ちすくむしかなかった。

「でも、俺……」

「わかってる、彼女……いるのよね。でも、私はあなたが好き」

そうやって僕を見つめるハルカを断ち切ることができずに、いけないこととは思いつつも僕は彼女のことを抱いた。そう、僕はハルカに対する優しさという名のもとに、自分の欲望を抑えることができなかつたのだ。僕はその時、自分で自分の弱さや儂さを垣間見て我ながら愕然としていた。

ふと目が覚めると、そこには見知らぬ部屋の天井があった。そして横を見ると、一人の女の子が静かに寝息を立てて眠っていた。僕はゆっくりと起き上がりながら、今の自分の状況を整理してみた。頭が割れるように痛かったが、それでも何とか頑張つて僕は昨日の夜からの出来事を思い出した。と同時に、今度は激しい後悔の念に襲われた。いくら流れの中とは言っても、決して許されるべきことではなかった。僕が好きなのはサオリであつて、ここに眠っているハル力ではないのだ。僕は二重の頭の痛みに苛まれながら、それでも何とかベッドから立ち上がり、自分の服を着ると流し台まで歩き、そこで水道の蛇口を思い切りひねつた。そして勢いよく出る水の下に頭を突っ込んで、ただひたすらに水を浴びた。おかげで幾分頭がすっきりしたが、今度は逆に自分がしてしまったことの重大さが身に染みてきた。僕はゆっくりと頭を振りながら、それでも何とか自分を取り戻し、朝のコーヒーを入れようと何気なくテーブルの上にあつたコーヒーマーカーのスイッチを入れた。朝起きると反射的にコーヒーを入れてしまうのが癖なので、僕はそのことに対して何も感じなかったが、よく考えてみれば何か少し可笑しいような気もしてきた。次第に出来上がっていくコーヒーをぼんやりと見ながら、僕はふとそんなことを考えていた。

やがてハル力がシャツを着て起きてきたので、僕はすかさずコーヒーを入れた。

「おはよう、コーヒー入れたけど」

「……ありがとう」

ハル力はそう言つと僕の前に座り、入れたての熱いコーヒーをゆつくりと飲んだ。

「美味しい」

「癖なんだ。朝コーヒーを入れるのが」

「いい癖ね」

どことなくぎこちない雰囲気が流れ、僕は正直居たたまれなくなつたが、その場を逃れるわけにもいかず、そのまま静かに話を続けた。

「夕べはごめん。俺……」

「それ以上言わないで。わかってるから、それ以上は……」

ハルカはそう言つてうつむいたまま、しばらくの間口をきかなかつた。どれくらいの間時間が過ぎたろうか、僕がぼんやりとした頭の中で次の言葉を探していると、ハルカが静かに口を開いた。

「シャワーあるから浴びてって。一緒に出勤するとまずいから先に出て。私仕度あるし」

「ああ」

僕は静かに立ち上がると、服を着て玄関から外に出ようとした。シャワーなんて浴びる気もしなかった。

「ちょっと待って」

「何？」

「私、後悔してないから」

そう言うハルカに僕はゆっくりと頷き、それから後ろ手で静かにドアを閉めた。起きた時とは違って、今となつてはハルカと同じように僕は後悔していなかった。もう一度やり直したとしても、おそらく僕は同じことをするだろう。でも、サオリに対する背徳感だけは拭いきれなかった。朝の日差しはそれでもいつもと同じように、僕を優しく照らしてくれた。

それきり、ハルカとは話をしなかった。それがお互いの気まずさからくることは明らかで、僕は以前のように気楽に言葉を交わせないことが少し寂しかったが、逆に内心ほつとしてもいた。そして、そういう自分がたまらなく嫌になっていた。

サオリとは今まで通り会っていた。相変わらず残業が多かったが、それでも僕は何とか時間を作り、自分の背徳感を打ち消すかのよう

にその貴重な時間を過ごした。でも、ハルカとの出来事とハードなスケジュールの影響で、いくら自業自得のこととはいえ僕は明らかに疲弊していた。サオリと会っていても自然と生返事が多くなり、彼女が怒り出すシーンも多々あった。僕は気変になりそうだったが、それでもそうすることが義務であるかのようにサオリと会い続けた。そしてそんな僕の様子を察したのか、サオリもあまり会おうとは言わなくなり、二人の関係に少しずつ溝ができて始めていたこともまた事実だった。

やがて月日は流れ、街は秋から冬へとその衣を変えていった。僕らはそれでも、何とか二人の世界を築き上げようとしていた。少なくとも僕はそう思っていた。たとえそれが僕の独りよがりであったとしても……そんな十二月二十四日の夜、僕は残業を終えると、サオリと会うために全速力で通りを走り続けた。既に待ち合わせ時間には大幅に遅れていて、電話で連絡しておいたとはいえサオリは怒っていると思っていたが、予想に反してサオリはそんな僕を優しく迎えてくれた。

「ごめん、待った……よな？」

「仕事だったんだから仕方ないわよ」

「メシは？」

「もう食べた」

「そうか、せっかく二人で食べようと思ったんだけど……悪かったな」

「ううん、気にしないで。それより、ちょっと歩かない？」

サオリはそう言つと、ゆっくりと海のほうへ歩き出したので、僕もすぐにその後を追った。程なく雨が降り出し、傘を持たない僕はサオリの傘の中に入って並んで歩くことになった。十分ほど歩くと目の前に海が見えてきたので、僕らは海沿いにボードウォークの舗道を歩きながら穏やかな時間を過ごした。

「雨が降っちゃったけど、何かこんなにゆっくりしたの久しぶりだな」

「仕事忙しいもんね。体のほうは大丈夫？」

「まあ何とかって感じかな」

「無理、しないでね」

「ああ、今の仕事が終わったら休みでも取るよ」

「ううん、そうじゃなくて……ヒ口、最近私と会っている時、すこ

く辛そうな顔してるから」

「それは仕事が忙しくて……」

「もちろん、それもあるんだろうけど……ねえ、何かあったの？」

「何かあって？」

「もしかして、好きな子できたの？」

「そんなこと、あるわけないじゃないか」

「ううん、私にはわかるの。ヒロ、何か私に隠してることがあるんじゃない？」

「そんな、隠してることなんかないよ」

「嘘、つかないで。私、ヒロに嘘つかれるのが一番悲しいからね、話して」

今ここでハルカとのことを話してはいけないことは、僕にも十分にわかっていた。でもサオリの切実な眼差しに、僕はまるで魔法にでもかかってしまったかのように身動きが取れなくなってしまっていた。

「俺、自分が本当に嫌になっただ。いつも肝心なことから逃げて弱くて情けない自分が……たとえサオリとの間がうまくいってなかったとしても、決してあんなことをするべきじゃなかったんだ」

「それって、他の女の子と……」

サオリの次の言葉を待つこともなく、僕は正直に頷いた。

「でも、信じてほしい。俺が好きなのはサオリだけだ。だから……」

「ヒロ、あなたが正直に話してくれたことは嬉しいし、話してくれたことでヒロのことを許したい。でも、私はそれほど大人じゃないから……ごめんなさい」

そう言うと、サオリはそのまま一人で静かに歩き出した。そして僕は、降りしきる雨に濡れながらただ呆然とその後ろ姿を見つめるしかなかった。雨はそんな僕の体を、そして弱い心を見透かしたかのように容赦なく叩きつけていた。そう、僕はいつかはこうなることを予感していた。たとえハルカとのがなかったとしても、僕とサオリとの心のずれがそのまま永遠に交わることはない時の輪の

ようにすれ違っていくことを……。

それからしばらくの間、僕がサオリと会うことはなかった。年が改まってもサオリからの連絡はなかった。僕は何度もサオリに電話をしようとしたが、その度に喉元でそれを押しとどめてしまった。そして本当に臆病で情けなかった僕は、ただひたすらに仕事にのめり込んでいった。サオリのことを考えないようにするために、そして何より臆病で情けない自分を忘れるために……。

やがて二月になり、僕は会社のあるプロジェクトで偶然にもハルカと一緒に仕事をするようになった。始めの頃は僕もハルカを妙に意識してしまい、二人の間に微妙な空気が流れたこともあったが、ハルカはそんな僕の想いを察したのか、努めて何気なく振舞ってくれたので、僕は次第にハルカと自然な態度で接することができるようになった。僕は、そんな風に接するハルカに大人を感じると同時に、女性に頼ってしまった自分にまた嫌気がさしていた。その日も僕が社内でのプレゼンを終え、そのまま会議室で一息ついているところにハルカがやってきて隣に座った。

「今日のプレゼン、よかったわよ」

「俺的にはイマイチだったけどな」

「ううん、今日に限らず、マツダくんよく頑張ってたもの……って
いうより、悲痛なほどの頑張りっていう感じだったけど」

「そうかなあ」

「何かあったの？ ひよつとして、あの時のことで彼女と……」

「まあ、いいさ。もう済んだことだから」

「よくないわよ！」

ハルカが急に声を荒げたので、僕は一瞬目を見張って彼女の瞳の奥を覗き込んでしまった。

「ごめんなさい。でも、私が言うのも変だけど、よくないわよ。マツダくん、このままで平気なの？ 後悔しないの？ 私、マツダくんには幸せになってほしいの。私が好きだった人だから」

ハルカはそう言うと、急に顔を赤らめて走って会議室を出ていった。僕はすぐそばに彼女の移り香を感じながら、ただその言葉の一つ一つを噛み締めていた。ハルカから言われるまでもなく、僕はこのままでは後悔することを自分でもよくわかっていた。でも臆病な僕は、次の行動をとることにさえ躊躇いを感じていた。

そして、それから一週間が過ぎた日曜日の夕方、僕は自分の家で一本の電話を受け取った。

「もしもし、サオリだけど……今、家にいるの？」

「ああ……この間はごめんね」

「ううん、いいの。それより、今から会えない？ 話したいことがあるの」

「ああ、いいよ」

「じゃあ、一時間後に海辺の公園で」

「わかった」

僕は死んだ電話を手にしながら、久しぶりのサオリの声をその胸に感じていた。でも、同時にサオリからの別れ話を予期している自分もいた。僕はその想いを振り切るように頭をゆっくりと左右に振ると、そのまま家を出て公園へ向かった。

一時間後に僕が公園に着くと、サオリは海を見つめる銅像の下に座っていた。

「ごめん、待った？」

「ううん、今来たところ」

「上の方に行こうか？」

僕らは並んで歩きながら公園の奥にある階段を上り続け、弓なりに続く砂浜と、その向こうに島の見える高台に立って、暮れゆく空に浮かぶ富士山を見つめた。

「ここから見る富士山って、すごく綺麗ね」

「ああ、もう二十年以上上見てるけど飽きないよ」

「ねえ、実は私、ヒロに謝らなきゃいけないことがあるの」

「謝らなきゃいけないのは俺の方なんだよ。だって……」

「そのことじゃないの。私、ヒロに隠していることがあるの。あの時、ヒロが正直に話してくれたことで、逆に私のほうが言えなくなっ

やって……ずっと辛かった。でも、私も正直に話すわ。去年の秋から冬にかけて、ヒロの仕事が忙しかった頃、私、ヒロに会っちゃいけないんじゃないかって、真剣にそう思ったの。だってあの時のヒロ、本当に辛そうだったから」

「だから、あの時は俺……」

「わかってる。でもあの時は、辛そうにしているヒロを見ている、私自身も辛かったの。だから、会わないほうがいいのかなって思っ
て。でも、それも辛くて……そんな時人数合わせで行った合コンで、ある人に話を聞いてもらったの。それで仲良くなって、何回か一緒に出かけたり、ご飯食べたりしているうちに、その人、私のことが好きだつて言ってくれて、それで……」

「キス……したんだね？」

「ごめんなさい。でも信じて。何て言うか弾みのようなもので、それから一度も会ってないわ。その人のことは何とも思っていないし、私が好きなのはヒロだけよ」

「俺は何も言える立場じゃないよ。俺はもっとサオリを傷つけたし……前にサオリ言ってたよな、人の気持ちって強いけど儂いものじゃないかって。だから今、この今の俺たちの気持ちこそが、一番大切なんじゃないかな。俺は今、サオリのことを愛してるし、この気持ちに嘘はないよ」

「ありがとう……よかった。私、すごく嬉しい。あつ、これ渡さなきゃいけないって思ってたの。ちよつと遅れちゃったけど」

それは三日遅れのチョコレートだった。僕はたまらずにサオリをきつく抱き締め、その弾みでチョコレートが地面にこぼれ落ちたことも気にならなかった。僕は、自分自身とサオリの身に起きたことを忘れるかのようにその唇を求め、そして二人の新たな出発を強く願った。夕暮れの富士山は、そんな僕らを暖かく見つめ続けていた。

それから僕は、再び二人の時間を築き上げ始めた。僕とサオリは、以前にも増して親密になれたような気がした……少なくとも僕はそう信じていた。三月に入ると、僕は会社のプロジェクトに追わ

れるようになったが、サオリが近くにいることを心で感じていたので不思議と疲れを感じなかった。たまに会社が早く終わった日や日曜日になると、僕は何よりもまず真つ先にサオリと会った。サオリと会って二人の時間を共有することだけが、その時の生きる全てと言っても過言ではなかった。でも僕は無意識のうちに感じていた。この二人のかけがえのない時間が長続きしないことを……僕はサオリを愛していたのではなく、二人の関係を続けていくことだけに精一杯だったからだ。

それは三月のある日曜日の夕方だった。僕はサオリをドライブに誘い、海岸道路を西へ走らせていた。でもその日のサオリは終始無言で、僕が何を話しかけても頷くか首を横に振るだけで言葉というものを決して発しなかった。僕はついにサオリとの会話を諦め、カーステレオのスイッチを入れた。するとドリカムの『星空が映る海』が流れ出したので、僕の心の中に二年前のことが過ぎり、その懐かしさのままに行き先を変え、あの時に行った海の見える高台へと向かった。高台へ続く沿道の桜はまだつぼみを開かせてはいなかったが、公園から見える夜景の美しさはあの時のままだった。僕は目の前に聳え立つ大きな鉄塔に歩を進め、オレンジ色に光る町の灯りと車の流れ、そしてその向こうに広がる夜の海の闇を再び目の当たりにした。

「サオリ、覚えてるだろ？ 二年前のあの時のこと」

サオリは僕の言葉には答えずに、ただその夜景をじつと見つめていた。

「サオリ、どうしたんだよ今日は。さつきからずっと黙ったままで」
サオリはなおも何も言わずにうつむいていたので、僕はもうそれ以上声をかけるのを止めた。そして、そのままどれくらいの時が流れただろう、サオリは急に顔を上げ、僕に向かって叫んだ。

「私、やっぱりヒロのことが好き……大好きよ！」

そして、いきなり胸に飛び込んできたサオリの唐突さに戸惑った

僕は、でも次の瞬間、その体をしっかりと受け止めていた。その時に、サオリの首から落ちたイルカのネックレスを捨てることも忘れて……。

そしてその夜から一週間後、僕の家ポストに一通の手紙が入っていた。裏を返してみると、それはまぎれもなくサオリからのものだった。僕は、夕暮れがせまる海辺の公園へ行きその封を開けた。

ヒロへ

初めて手紙を書きます。本当は直接会って話をしなければと思っただけ、できそうにないので手紙にしました。この間はごめんなさい。実は今月に入っすぐ、街で偶然コウジと会いました。一年ぶりだったからちよつと懐かしくなつて、いけないとは思つたけど喫茶店でおしゃべりしました。それから二、三回会つて、食事をしたり遊びに行ったりして……私、正直言つて、コウジと会つて心の安らぎを感じました。最近いろいろとあつて、もちろん私も悪いんだけど、久しぶりに落ち着けた感じがして、ヒロには悪いと思つたけど……その後ヒロと会つて、あの高台から夜景を見た時、私迷つてたの。このままヒロと付き合つていいのかなつて。コウジと会つたからつていうのもあるけど、最近のヒロを見ていて、私じゃ駄目なんじゃないか、私じゃ助けてあげられないんじゃないかと思つたの。もしかしたら、ヒロとは友達のほうがよかつたんじゃないか。でもあの時は、やっぱりヒロのことが好きだったからヒロの胸に飛び込んだの。私を、私の心を繋ぎとめていてほしかったの。でも二日後にコウジと会つて、やり直せないかつて言われ、それから三日間家で考えたの。考えて考えて出した結論……私、コウジと付き合います。やっぱりヒロとは、友達のほうがいいと思ふの。だつてヒロ、私と付き合い始めてからいろいろと辛かつたでしょ？ 私わかつた。最近のヒロ、すごく無理してたもの。私いづも言いたかつた。そんなに無理しなくてもいいよつて。でも言え

なかった。だって、それがヒロなんだから。でも、友達なんて虫がよすぎるよね。わかってるけど、私ヒロを失いたくはないの。この広い世界の中で、私にとってヒロはすごく大切な人だから……。

ヒロ、今この手紙読んでてすごく傷ついてるよね。ごめんなさいでも、これだけは信じて。私、ヒロと一年間付き合っただけど、十年くらい一緒にいた気がするの。それくらいヒロのことが好きだったし、毎日が楽しかった。そして、人の気持ちの強さや儂さを教わりました。もし許されるのであれば、もう一度私の友達になってください。

P・S・
ネックレス、返します。素敵な毎日をありがとう。

手紙はそうして終わっていた。そして封筒の中には、既に輝きを失っていたイルカのネックレスが入っていた。僕は手紙をもう一度丁寧に読み返し、その後暮れゆく空と海をただぼんやりと眺めた。僕は悲しかった。というより悔しかった。あまりの自分の不甲斐なさや弱さ、そして儂さが悔しかった。でも、それはまぎれもない事実だった。たとえどれだけ叫んでも、どれだけ泣いても、その事実を拭い去ることはできない……僕は自分の胸からイルカのネックレスを引きちぎると、サオリのネックレスと一緒に海へ放り投げた。そして、大きく弧を描いて海の彼方へと消えていくその姿を、夕暮れと涙でぼやけていく姿を眺めながら、僕はただ泣き続けた。不思議と声は出なかったが、涙はとめどなく溢れてきた。それはまぎれもなく僕の心の血だった。かつてユキの心の血が僕の心を締め上げたように、僕は自分の心の血で自分自身を締め上げていた。そう、今なら僕はあの時のユキの気持ち痛みほどにわかった。そしてユキに対する贖罪の想いが、次第に切ない想いとなって僕の心を覆っていった。でも、全てはもう遅かったのだ。サオリとのこともユキとのことも、全ては自分の弱さや儂さとともに、砂上の楼閣のように音もなく崩れ去ってしまったのだ。

僕はそうして泣き続けたまま、しばらくは抜け殻のような時を過ごした。もちろん涙のほうはとうの昔に枯れ果ててしまったが、込み上げてくる心のうめき声を抑えることはできなかった。サオリがいなくなってしまった事實は、まるで僕の胸に風穴が開いたような虚しさをもたらし、同時にユキに対する想いを確実に募らせていった。でも、どれだけ相手のことを想っても、またどれだけ相手のことを愛しても、越えることのできない高い壁があることを、僕は無意識のうちに確実に体得していた。だからこそ、忘れるしかないのだ。今までのことは思い出のアルバムに貼られたセピア色の写真になったとしても、これからはその思い出を胸に抱きつつも、時の扉の向こうにしまい込むしかないのだ。そしてそうすることで僕は、この深い心の闇から解放され、大海を泳ぎまわるイルカになり、飛び魚のアーチをくぐり抜けたその向こうにある楽園にたどり着くことができるだろう。

これから、これほどまでに人を愛することはないかもしれない。このまま永遠に時の波間を揺らめいて、喜びも哀しみも感じないままに人知れず死んでゆくだけかもしれない。でも、それでも僕は生きるしかないのだ。たとえば疲れ果てた拳句に道端で血反吐を吐いて倒れたとしても、たとえば生き抜いた果てに無限の荒野が広がっていったとしても、僕はその醜態を他人にさらして、そしてその虚しさを自分に問いかけながら、ただひたすらに生き続けるしかないのだ。そう、それこそが人生というものなのだ。僕はサオリやユキと出会ったことで、生きることとは何かということを感覚的に身につけていた。

でも同時に僕は、心のどこかで一筋の光を求めてもいた。そう、それはあたかもパンドラの箱の片隅に一片の希望が残っていたように……そして、それが現実になったのは、それから二年が過ぎた春のことだった。

あの時、そうイルカのネックレスを海に投げてから二年の月日が流れた。今思い返せば二年なんてあっという間だった。いや、一日は長かったけれど、二年をまとめて振り返れば短く思えるだけなのかもしれない。いずれにしても、二年という期間はあっという間に過ぎ去った。僕は、相変わらず同じ会社で砂漠に水をまく仕事を続けていた。サオリと別れた直後は会社でも仕事に身が入らず、ミスばかりしていたが、最近ではそれも過去のことになった。本当に、時の流れというものは人の心を癒してくれるものだ。今でも、時々サオリやユキのことを思い出すとどうしようもなく胸が苦しくなるが、いずれはそういうこともなくなるのだろう。そしてその時こそ、二人とのが思い出になる瞬間なのだろう。季節は春真っ盛りで、駅から会社へと至る道路沿いにある桜の木々からは、桃色の花びらがまるで天使のようにひらひらと舞い落ち、路面をじゅうたんのよう敷き詰めていた。季節の移り変わりは、本当に当たり前のようにやってくるのだ。

そんな四月のある日、僕が会社の食堂で昼飯を食べていると、一人の女の子が隣に座り僕に向かって話しかけてきた。そう、それはまぎれもなくハルカだった。

「マツダくん、今度の日曜日引越すの？」

「ああ、そのつもりだけど」

「手伝いに行こうか？」

「いいよ。ハルカだって、結婚式近いんだからいろいろと忙しいだろ？」

「まあ、そうだけど……でもほら、たまには気晴らししないかね」

「おいおい、俺の引越しの手伝いが気晴らしかよ」

「まあいいじゃない。ねっ、私意外と役に立つわよ」

「まあ、いいけどな」

「じゃあ、今度の日曜日に家に行くから」

ハルカはそう言うと、そのまま席を立って食堂を出ていった。確かに僕は、今度の日曜日に、実家の鎌倉から都心に程近いマンションに引越すことにしていた。毎日の通勤が辛かったこともあったが、親と一緒に住んでいると何かと自由がきかないこともあって、この際思い切って一人暮らしをすることにしたのだ。生活はかなり苦しくなるが、一人暮らしの気楽さもあり、僕は結構楽しみにしていた。ハルカには、少し前に同期で飲んだ時に言っておいたのだが、まさか手伝いに来るとは思っていなかった。正直なところ驚いた。ハルカは六月に結婚を控えていて、それどころではないと思っていた。相手は僕の知らない男で、まあそれはどうでもいいことなのだが、知り合って三ヶ月というスピードだった。僕が初めてそのことを聞いた時は、その唐突さに本当に驚いたものだった。でも、結局そんなものなのだろう。人生なんて一寸先には何があるかわからないのだ。

そして日曜日、僕が新しいマンションの部屋で荷物の整理をしている時にチャイムが鳴ったのでドアを開けると、そこには顔が見えないくらいにビニール袋を抱えたハルカが立っていた。

「こんにちは」

「おいおい、何だよそのたくさんの袋は」

「引越したばかりだと、いろいろというんじゃないかと思って。ちよつと買い過ぎちゃったけど」

「まあ、とにかく入れよ」

僕はハルカを部屋に通し床に座らせると、引越し用のダンボール箱からカップを二個取り出してインスタントコーヒーを入れた。

「ありがとう、相変わらず優しいね」

「俺を褒めても何も出ないぞ」

「わかってるわよ」

僕らはコーヒーを飲みながら、窓の外に広がる景色を何気なく眺めた。

「まあまあ景色ね」

「最上階の五階だからな」

僕のマンションは新宿に程近い郊外にあり、ハルカのマンションに意外と近かった。もっともハルカは結婚したら引越すので、すぐに離れてしまうのだが……。

「ところでマツダくん、今彼女いるの？」

「いや、いないけど」

「実は、私の大学の友達で彼氏募集中の子がいるんだけど、今度会ってみる？」

ハルカのこの突然の提案に、僕は正直面食らった。サオリと別れてから二年、友達の紹介や合コンを通じて何人かの女の子と知り合ったが、どの子ともいまひとつうまくいかなかったので、今度もそ

うなるだろうと思う反面、新たな出会いの予感に何となく心躍る自分もいた。僕が返事を躊躇っていると、すかさずハルカが捲くし立てた。

「もしかして、ハルカの紹介じゃあろくな女じゃないって思ってるでしょ？」

「そんなこと思ってないけど」

「大丈夫よ。ちょっと大人しい子だけど、性格いいし、結構美人なんだから」

「本当か？」

「またあ、鼻の下伸ばしちゃって。まあいいわ。で、どうする？会ってみる？」

「そうだな、会ってみるか」

「何よ、その気のない返事は。他ならぬこのハルカさんが、とっておきの女の子を紹介しようって言うてるのよ。もうちょっと喜んでもいいんじゃない？」

「わかった、わかった。ありがとうございます。本当に、涙が出るくらい嬉しいよ」

「それでよろしい。じゃあ、私がセッティングするから、詳しいことが決まったらまた連絡するわ」

「ああ、頼むよ。いやあ、でもハルカみたいな友達持って、俺は本当に幸せ者だな」

「またあ、そんなこと言っても何も出ないわよ。さて、それじゃあ部屋の片付けでもしようかしら」

ハルカはそう言うと、髪の毛を後ろに束ねて、飲み終わったコーヒークップを流して洗い、その後ダンボールから食器や衣類を取り出して戸棚やタンスにしまい始めた。ハルカの手際によさには、僕もすっかり感心した。戸棚の中の食器はあたかも最初からそこにあったかのように整然と並べられ、タンスの中の衣類はきちんと整理されて自然に収まっていった。

「ハルカは、きつといい奥さんになるよ」

「だから、そんなこと言ったって何も出ないって言ってるでしょ。ほら、マツダくんもぼおつとしてないで、そのダンボールをこっちへ持ってきてよ」

「はいはい」

ハルカは半日かけて僕の部屋をすっかり片付けてくれたので、最後に部屋中に掃除機をかけ終わった頃にはもうすっかり夜になっていた。

「さてと、これで完璧ね……じゃあ、私帰るね」

「夕飯でも食べに行こうか？ もう夜になっちゃったし、今日のお礼も兼ねてさ」

「ありがとう。でも、今日は帰るわ。ちょっと用事もあるし」

ハルカはそう言うと、束ねていた髪をほどいてからバッグを抱えて立ち上がった。僕はハルカをマンシヨンの下まで送った。あたりは既にすっかり夜の闇に包まれていて、ふと頬をなでる春の夜風が、僕に何となく懐かしい想いを抱かせた。

「今日は本当にサンキューな。また飯でもおごるよ」

「いいのよ、気にしなくて。それより、さっきはとても嬉しかった」
「えっ？」

「マツダくんに、いい奥さんになるって言われて、私本当に嬉しかった。ありがとう。やっぱり、マツダくんは私にとって大切な人……じゃあ、また明日ね」

ハルカはその言葉と笑顔を残してその場を立ち去った。そして僕は、その笑顔を少し複雑な気持ちで受け取った。ハルカとのことはもちろん今となっては後悔していない。もう一度人生をやり直したとしても、僕はやはり同じことをするだろう。でも仮に、もう少し違った状況でハルカと出会えたなら、僕らはもっとうまくやれたかもしれない……去り行くハルカの後ろ姿を見送りながら、僕はふとそんなことを考えていた。

それから十日ほどが過ぎた水曜日、僕は仕事が終わった後、ハルカと一緒に会社に程近い店に足を運んだ。ハルカの友達はその女の子はもう店で待っているとのことなので、僕は少し緊張しながら店の中に入った。そこは創作料理を出す無国籍料理の店で、雑誌などにも載っている結構有名な店だったが、その割には結構空いていた。「ああつ、マツダくん、ひよつとして緊張してない？」

「ま、まさか。変なこと言うなよ」

「まあいいわ……あつ、いたいた。あそこよ」

僕はハルカの指差す方向を見て、次の瞬間あまりの偶然の出来事に体が身動きできなくなってしまった。ハルカの指し示す方向のテーブルには、一人の見覚えのある女性が座っていて、僕とハルカはゆっくりとそこに向かった。そう、そこに座っていたのはまぎれもなくユキだった。ユキも僕に気がついたらしく、驚きと戸惑いを合わせたような複雑な表情を浮かべていた。そしてハルカは、そんな僕らの態度や顔の表情に少し疑問を持ったようだった。

「ねえ、二人ともどうしたの？もしかして知り合いだったとか」

「いや、ちよつと……昔の同級生に似てたから」

「ふうん……まあいいわ。さつ、座りましょう」

僕は精一杯その場を取り繕って席に座った。ちよつとユキの真向かいに座った格好になったが、僕はユキのほうをまともに見ることができなかった。ユキも同じ気持ちだったらしく、うつむいたままこちらに顔を向けようとはしなかった。

「二人とも、何うつむいてるのよ。お見合いじゃあるまいし……ああ、紹介まだだったわね。マツダくん、こちらが私の大学時代からの友達のユキ」

「……はじめまして、ユキです」

「そしてユキ、こちらが私の会社の同期でマツダくん」

「……はじめまして、マツダです」

「さて、紹介も終わったことだし、何か飲もうか？」

そう言うと、ハルカは僕らの飲み物と料理を注文し、僕に対してはユキとの関係を、そしてユキに対しては僕との関係を、少し冗談も交えながら楽しそうに話した。ハルカにとつてみれば、初対面の二人に対しての精一杯の気遣いであり、本来ならそんなハルカに感謝すべきなのだが、その時の僕にはそんな余裕は全くなかった。ただ、偶然にもユキと会ってしまったことを自分なりに整理することに精一杯で、ユキと再会できた喜びを感じる暇すらなかった。そんな訳で会話が盛り上がるはずもなく、ただハルカの話し声だけがひたすらに響くだけになってしまった。

そうして一時間ほどが経ったところでハルカの携帯に電話が入り、急用で席を立つことになった。

「じゃあ悪いんだけど、私急用が入っちゃったからこの辺で帰るね。あとは二人でごゆっくり」

「何言ってるんだよ……でも、今日はありがとう」

「マツダくん、あとはしつかりね」

ハルカは、僕にそう耳打ちすると足早に店内を後にした。そして取り残された二人の間には、何とも言えない重苦しい雰囲気だけが残った。

僕は何と言っているかわからず、ただ頭の中でひたすらに言葉を探し続けた。でも、気の利いた言葉は一言も思いつかなかった。思えば三年以上も前に、あの雪の降る公園で別れたきり一度も会っていないのだ。でも、ユキのことを忘れたことは一度もなかった。サオリと別れた時も、僕は真っ先にユキのことを思い出し、彼女に対する想いに胸がきつく締め上げられたのだ。その時の想いを、この胸の想いを、今ここで言えたらどんなにすっきりするだろう、どんなに心が晴れるだろう……でもそう思えば思うほど、僕は何も言えなくなってしまうた。いつもながら、自分の弱さと情けなさには本当に腹が立った。

「場所、変えない？」

「ああ、そうだな」

ユキのこの一言に助けられ、僕らはその店を出ると近くにあるシヨットバーに入った。そこは飛び込みで入った割には落ち着いた雰囲気の良い場所で、僕らは空いている席に並んで座り、僕はウィスキーのダブルを、ユキはソルティードッグを注文した。

「そう言えば、昔二人でいろいろな所に行ったけど、こういう所には来なかったわね」

「そう言えば、そうだな」

「私、さつきは本当に驚いたわ。だって、急に目の前にマツダくんが現れるんだもの。もう心臓が止まるかと思った」

「俺もだよ。まさかハルカの友達がユキだったなんて、本当に驚いたよ」

「世の中なんて本当に狭いわね。ねえ、あれから何年経ったかしら？」

「ああ、三年以上経ってるな」

「そう……でもあの時、私本当に辛かったのよ。私、マツダくんのこと大好きだったし、でもマツダくん、私からもう離れちゃってるし……本当に辛かった」

「ごめん、俺が悪かったんだ」

「いいの、今さらそのことを責めようなんて思ってないし……仕方ないもんね」

ユキのその言葉の後を、僕はうまく繋げることができなかった。

謝る以外の言葉が頭に思い浮かばなかった。

「ところで、サオリさんとはうまくいつてるの？ ひょっとして、もう結婚の約束とかしてたりして」

「サオリとは……別れたんだ。一年くらい付き合ったんだけど、うまくいなくて」

「そう……で、今は彼女いるの？」

「いないからハルカに頼んだんだよ、友達紹介してくれて」

「そうだよ。でも、私だったからがっかりしたでしょ？」

「そんなことないよ。むしろ、ユキでよかったと思ってるんだ。元々ユキが嫌いで別れたわけじゃないし……よく思い出してたんだ、ユキのこと」

「私も、マツダくんのこと嫌いで別れたわけじゃないから」

そう言ってうつむいたユキの姿が、僕を四年前の、ユキと初めてデートした横浜の公園へと誘った。そして僕は、鮮明に現れた記憶と今の自分の想いを重ね合わせ、胸の高鳴りと激しい衝動を抑えることができなかった。

「なあ、俺たちやり直せないかな？俺、やっぱりユキのことが好きなんだ。虫がいい話かもしれないけど、もう一度やり直したい」

僕はそう言って、目の前のウイスキーを一気に飲み干した。でも次の瞬間、ユキの顔がだぶって見えたかと思うと、急に目の前が真っ暗になった。暗闇の中では笑顔のユキが、ただひたすらに僕に微笑みかけていたが、僕がその体に手を触れようとすると、ユキはその笑顔を浮かべたまま暗闇の中にその身を隠してしまった。僕は本当に哀しかった。そして切ないくらいに孤独だった。

ふと目が覚めると、そこには見知らぬ部屋の天井があった。僕はそのまま部屋をぐるりと見回したが、自分の部屋でないことだけは確かだった。とすると、ここはどこなのだろう……僕はベッドから起き上がったが、同時に激しい頭痛に見舞われた。昨日のことを思い出そうとしたが、ユキとバーで飲んだ後のことはどうしても思い出せなかった。僕は割れるように痛む頭を抱えながら、それでもどうにか立ち上がり部屋のドアを開けた。すると目の前にはリビングとダイニングキッチンが広がり、キッチンでは一人の女性が料理の仕度をしていた。後ろ姿ではあったが、それがユキであることは間違いないかった。ユキは僕に気がついてらしく、こちらに振り向いて言った。

「おはよう。今朝ごはん作ってるから、そこで座って待ってて。あつ、今コーヒー入れるから」

「あつ、いいよ。コーヒーくらい自分で入れるから」

「そう、じゃあお願いね」

僕はテーブルに座り、目の前にあつたカップにコーヒーを注いだ。カップはシンプルだったが、薄いブルーの花柄が飾られていてとても品がいいものだった。

「よく覚えてないんだけど、夕べ俺どうしちゃったんだろう?」

「やっぱり覚えてないんだ……そうよね、かなり酔ってたもんね」

「俺、何か変なことした?」

「別に……ただ、ずっと眠ってたけど」

「詳しく教えてくれないかな? バーでユキと飲んでいたところまでは、何とか覚えてるんだけど」

「ああ……マツダくん、ウィスキー一気に飲んだ後、急にカウンタ―にうつ伏せになって寝ちゃったの。だからお店の人にタクシー呼んでもらって、私の部屋に連れてきたの。マツダくんを抱えて、マ

ンションの階段上がるのは結構大変だったけど」

「大変だったよな。本当にごめん」

「いいのよ、気にしないで。きつと疲れてたのよ」

「でも、俺としたことが、まさかユキに送ってもらうなんてな……あつ、でも家は鎌倉だったよな？　ここ鎌倉？」

「あれ、言ってなかったっけ？　私、一年前から一人暮らし始めたの。そして、ここが私の部屋」

ユキは新宿の郊外の、僕のマンションに程近い場所で一人暮らしをしていた。そう言われて部屋を見渡すと、確かに一人暮らしの女の子らしい空間が広がっていた。言葉では表現し辛いけど、そういう部屋の雰囲気なのだ。

「へえ、実は俺も、ついこの間引越してきたんだ。ここから結構近いんだぜ」

「そうだったんだ、よかった。私、一人暮らしするの初めてだから結構心細かったの。マツダくんが近くに来てくれれば安心ね」

「まあ、これでも一応男だからな。用心棒でも何でもやってやるよ」

僕らは、ユキの作ってくれた朝飯をゆっくりと食べた。トーストにハムエッグ、そしてコーヒーと、いたってシンプルなものだったが、ユキと一緒に食べる朝飯はまた格別なものだった。僕は毎朝を、いや毎日をこんな風にユキと一緒に過ごせたらどんなにいいだろうと思った。僕はユキとの毎日の中で思い描くうちに、彼女とこのままずっと一緒にいたいという、緩やかだが激しい衝動に駆られた。でもその思いは、ユキからの一言で立ち消えとなり、僕は急に現実へと引き戻された。

「ねえ、どうしたの？　何だかぼおとしちゃって」

「いや、まだちょっと眠くて」

「そう……ところで、今日会社でしょ？　時間は大丈夫？　遅刻するんじゃない？」

「あつ……でも、もういいや。今さら間に合わないし、休暇も余っているから休むよ。ところで、ユキこそ会社は？」

「今日は休みなの。だから平気……そうだ、せつかく休み取るんだつたら、二人でどこかに行かない？ たとえば……横浜なんかどう？ 久しぶりに」

「そうだな。よし、じゃあ行こう」

僕はユキと朝飯の片付けをした後、会社に電話をかけて上司に休むことを伝え、二人で電車を乗り継いで横浜に向かった。そこは横浜では割と新しく開発された場所で、高く聳え立つタワーやホテル、港を臨む公園などが肩を寄せ合うように固まっていた。僕らはまずタワーに行き、ウィンドウショッピングを楽しんでから港を臨む公園をゆっくりと歩いた。その日は天気もよく、頬にあたる海風がほのかに春の匂いを、そして僕のユキへの想いを運んできた。僕らは公園内にかかる小さな橋のたもとで歩を止め、流れ行く時を海風に感じながらしばらくその場に佇んだ。四年前のあの夜を徐々に思い出しながら……。

「ねえ、覚えてる？ 私たち、四年前にもこうやって海の音を聞いてたのよ。私、あの時とても幸せだった。とても……」

「俺もだよ、俺も幸せだった……ユキ、こんなこと言える立場じゃないけど、俺たちもう一度やり直せないかな？ 俺、今度こそユキを守るから。俺、今でもユキのこと……好きだよ」

僕のその言葉に、ユキは黙ってただ下を向いていた。

「駄目……かな？」

「……駄目よ。駄目って言いたい。でもやっぱり、私はマツダくんが好きだから」

そう呟いて恥ずかしそうにうつむくユキを、僕は思い切り抱き締めた。強く、ただひたすらに強く、僕は自分の想いの全てを捧げるようにユキを抱いた。

「今までごめんな。もう二度と離さないから……ずっと離さないから」

「……嬉しい」

僕はユキの体を少し外すとそっとその髪をかき上げ、静かに目を

閉じた彼女の唇に自分の唇を触れ合わせた。静かに、でも強く、僕らは互いの唇から体全体にまでその愛を確かめ合った。僕はその時、二人の心が一つになったことを体感し、その心地よい雰囲気陶醉した。そして、どれくらい時間が過ぎただろう、ユキが僕の目を見ながらふと呟いた。

「ねえ、観覧車乗ろうよ。久しぶりに」

僕らは、四年前にそうであったように肩を寄せ合いながら観覧車に向かってゆっくりと歩き出した。ユキは恥ずかしそうにうつむきながら、僕の腰にそつと手を回していた。僕は、そんなユキの肩をしつかりと抱き寄せた。二度とユキを離すことがないように、そして、この瞬間が永遠に続くように……。

観覧車は以前と同じように、真下から見るととても大きかった。夕方とあって並んでいる人は多かったが、僕はそれが少しも気にならなかった。むしろ、この列が永遠に続けばいいとさえ思った。そして三十分ほど待たただろうか、僕らの順番がやってきたので乗り込んだ。僕とユキは並んで座り、夕焼けに染まる横浜の港とそこにかかる白い橋をただじつと眺めた。

「綺麗ね」

「この瞬間が、永遠に続けばいいのにな」

「続くわよ、永遠に」

僕はユキの肩を抱き寄せると、互いの唇を激しく求め合った。ユキの唇を通じて、僕は彼女の想いをはつきりと感じ取った。四年前と同じように、いやそれ以上に、僕らは確かに幸せを感じていた。

僕はこの時、ユキのことを他の誰よりも愛していた。そして、もう二度とユキを離さないと固く心に誓った。

次の日、いつものように僕が会社の食堂で昼飯を食べていると、ハルカが僕の隣に座って話しかけてきた。

「ねえ、どうだった？」

「どうだったって？」

「何よ、とぼけちゃって。ユキとどうだったのよ。うまくいった？」「まあな」

「そう、よかった。実は、ちょっと心配だったんだ。ひよつとして、あのまま二人とも駄目だったんじゃないかって。だって、雰囲気あんまりよくなかったから」

「実は俺、ユキと昔付き合ってたんだ。もう四年も前の話だけど…：付き合ったのは一年足らずだったけど、まさかハルカの友達だったなんて。それでびっくりしたんだ」

「そうなの？　じゃあ私、悪いことしちゃったかな？」

「そんなことないよ。むしろハルカに感謝してるんだ。俺たち、また付き合うことにしたんだ」

僕がそう言った瞬間、不安げだったハルカの表情が、見る見るうちに明るくなっていくのが手に取るようにわかった。

「よかった。マツダくんがユキと付き合うことになって。私、とても嬉しい。ユキは私の大切な友達だし、相手がマツダくんなら安心だわ。これからユキのことよろしくね。あの子本当にいい子よ…：あつ、もうわかってるわね」

「ハルカ、本当にありがとう。偶然とはいえユキとまためぐり合えたのも、ハルカのおかげだよ。本当にありがとう」

「何言ってるのよ。前にも言ったでしょ？　マツダくんは私にとって大切な人だって…：あつ、もうこんな時間。午後一番で大事な打ち合わせがあるから、じゃあまたね」

ハルカはそう言うのと慌しく食堂を出ていった。僕はそんなハルカ

に対して、ただ感謝の気持ちで一杯だった。と同時に、ハルカとユキが友達だったことを神様に深く感謝してもいた。

その日の午後、僕が得意先へ行くために会社から駅に向かって舗道を歩いていると、一人の女の子が倒れていたのが視界に入ってきたので、僕は思わず声をかけた。

「大丈夫ですか？」

「あつ、大丈夫です。ちょっとヒールのかかとが取れちゃって……」

よく見ると、彼女はヒールのかかとを舗道の窪みに挟んだらしく、かかとの部分がヒールから取れて道端に転がり、その膝からはうっすらと血が滲んでいた。

「足から血が出てるじゃないか。ちょっと待ってて」

僕はハンカチで彼女の膝から滲んでいた血を拭き取ると、ポケットから絆創膏を取り出してその傷に貼った。

「とりあえず、怪我のほうはこれで平気だと思うけど、ヒールのほうがな……あつ、確か駅の近くに靴屋があったから、そこでとりあえず直してもらうか、新しいのを買えばいいよ。さあ、俺の肩に掴まって、駅はすぐそこだから行こう」

「いろいろ……すみません」

僕は彼女に肩を貸して、駅前の靴屋まで一緒に歩いた。彼女はしきりに僕に対して謝っていたが、僕はそれをただ笑顔で交わした。十分くらいで靴屋に着いたので、僕はひたすら謝り続けるその女の子と別れ、駅から電車に乗り込んだ。この偶然の出会いが、後に僕に何をもたらすかも知らずに……。

それから何日かが過ぎたある日、僕が会社の廊下を歩いていると、突然女の声で背後から声をかけられた。

「あの、すみません」

その言葉に振り返った僕は、見覚えのある顔がそこにあることにとても驚いた。そう、その時の僕はまるで偶然に操られたマリオネ

ツトのようだった。

「この前は、助けてもらってどうもありがとうございました」

僕がその記憶を取り戻すまでに、それほどの時間はかからなかった。そう、あの時の駅まで付き添ってあげたヒールのかかとの女の子だった。

「……ああ、どう？ 大丈夫だった？」

「はい、おかげさまで、ヒールも直してもらって、足の傷ももう治りました」

「そう、それはよかったね。でも、どうしてここに？」

「あ、はい、私この社員なんです。短大を卒業して、入社して三年目になります。でもびつくりしました。さつき見かけた時、もしかしたら違うんじゃないかと思っただんですがやっぱり間違いないと思っ……この前のお礼が言いたくて、本当にありがとうございました」

「もういいんだよ。それに、お礼はこの前たくさん聞いたし」

「でも、改めて言うておきたかったです。私、メグミっていいます。ところで……この前のお礼も兼ねて、食事でもどうかなって思ってるんですけど、夜とか空いてる日ありますか？」

「いいんだよ、気遣わなくても」

「いえ、お礼させてください。でないとな私の気が収まらないんです」

「そう……じゃあ、ごちそうになろうかな。今日は仕事あるから、明日の夜でいい？」

「明日ですね、わかりました。それじゃ、えーと……すみません、名前は」

「あっ、そうか、まだ俺の名前言ってなかったね。マツダっていいます、よろしく」

「マツダさんですね。それじゃあまた」

その女の子……メグミは、そう言うつと廊下を足早に歩いていった。僕は、あの女の子がこの会社にいた偶然にまだ慣れていなかったが、何か新しい風が吹き込んだようにも思えてその後ろ姿を黙って見送

つ
た。

次の日の夜、僕とメグミは会社の出口で待ち合わせ、会社とは駅を挟んで反対側にある日本料理の店に向かった。メグミのお勧めの店のようで、店内に入ると落ち着いた雰囲気、でも押し付けがましい高級感もなくとてもいい店だった。メグミは予約を入れておいたらしく、彼女が店員に名前を告げると程なく奥の座敷へと通された。

「予約しておいてくれてたんだ」

「この店すぐに一杯になっちゃうんで、昨日あれからすぐに電話しておいたんです」

「メグミちゃん、よくこの店来るんだ」

「ええ、会社に近いんで、同期の女の子とよく来るんです。雰囲気もいいし、でも値段は高くないし、お勧めですね」

僕らが座敷に座ると、店員が今日の料理の説明をした。感じのいい店員で気配りも行き届いていた。

「メグミちゃん、和食好きなんだ」

「ええ、イタメシなんかよりもやっぱり和食ですね」

やがて少しずつ料理が運ばれてきた。どの料理も品があり、かといつてどこか懐かしい感じのする味がして、僕はいつも以上に箸を動かした。

「ところでマツダさん、同じ会社のスズキさんって知ってますか？」

「ああ、知ってるも何も俺の同期だよ」

「本当ですか？ 実は、私の同期にスズキさんのことをすごく好きな子がいるんですが、もしマツダさんが迷惑でなかったら、スズキさんを誘って飲みにも行きませんか？」

「いいね、やるうよ。確かスズキも彼女いないって言ってたし、ちようどいいかもな。わかった、スズキには俺から話しておくよ」

「ありがとうございます。それで……マツダさんは、彼女とかいる

「んですか？」

「ああ、まあ……」

「そうなんですか……そうですよ、わかりました。それじゃあ、詳しいことが決まったら連絡しますね」

メグミはそう言っていると、グラスに残っていたビールを一気に飲み干した。思わぬ展開ではあったが、スズキのためでもあるし、ここは一役買おうと僕もビールを一気に飲んだ。もっとも僕は、メグミの気持ちに気がついてはいなかったが、彼女の自然な明るさに不思議な爽快感を抱いていたのもまた事実だった。

それから一週間が経ったある日の夜、僕はスズキと会社の後輩を連れて会場へと向かった。そこはカジュアルなビアレストランで、店内が混雑していたせいで僕はメグミを見つけるのに苦労したが、やがて奥のほうの席からこちらに手を振るメグミが見えたので、僕はその席に近づいていった。

「マツダさん、ここです！」

「見つけるのに苦労したよ」

そう言っただけでメグミの隣の女の子を見た瞬間、僕はあまりの驚きで声を失った。偶然に操られたマリオンネットは、もはや自分で動くこともできなくなっていた。髪形が変わり少し大人っぽくなってはいたが、それはまぎれもなくサオリだった。どうしてサオリがここにいるのか……僕は、偶然というにはあまりにも偶然なこの再会にただ戸惑っていた。サオリもこちらに気がついていたらしく、しばらく僕をのぼろと見ていたが、やがて僕から目をそらしてうつむいた。「マツダさん、何ぼおっとしてるんですか？ さっ、座ってください」

メグミのこの一言に僕はやっと我に返り、スズキたちとともに席に着いた。

「へえ、みんな可愛いじゃないか」

「あ、ああ……」

スズキの言葉にも僕はうわの空だった。僕は目の前にいるサオりに何と言おうか、ただそれだけで頭が一杯だった。

「さあ、これでみんな揃ったことだし、さっそく乾杯しましょうか？」

メグミは、そんな僕の動揺を知ってか知らずか乾杯の音頭をとり、少し経ってから僕らはお決まりの自己紹介をした。その最中も、僕はサオリのが気がなって仕方がなかった。サオリはスズキやメグミたちと楽しく話していて、僕のことなど眼中にないようだった。僕はその場に居たたまれず、たまに心配そうに声をかけてくれるメグミの話もほとんど耳に入らなかった。サオリに会えた喜びもあったが、それよりもまず僕は、この不安定で居心地の悪い状況から逃げたい一心で頭が一杯だった。

やがて時間の経過とともにその場はお開きになり、二次会にカラオケに行こうということになったが、僕はとてもそんな気になれず、メグミには悪いとは思ったが一人こっそりと抜け出してみんなとは反対の方向に歩き始めた。すると、後ろのほうから女の声があったので振り向くと、そこには息を切らして駆けてくるサオリがいた。

「はあはあ……ヒロ、早足なんだもん。追いつくの大変……」

僕は何と声をかけていいかわからず、ただ黙ってサオリの姿を眺めていた。

「どうしてカラオケ行かないの？」

「ああ、ちよつと疲れちゃって」

「そう……ねえ、どこかで話さない？ 久しぶりだもん。ね、いいでしょ？」

僕らは近くにあったショットバーに入り、隣り合わせに座った。

僕はウイスキーを、サオリはカルアミルクを注文した。

「そう言えば、昔はこういう店に来たことなかったよね？」

「そうだったかな？」

「うん、何か不思議な気がする。ねえ、二年ぶりだよ、私たち」

「そうだな」

「二年なんてあつという間ね」

そうして懐かしさに浸っているサオリを横目に、僕はただ黙ってウイスキーを飲み続けた。一杯そして二杯……でも三杯目を飲み始める頃には、僕はこの中途半端な状況に我慢できなくなっていた。

僕は彼女と、今隣に座っているサオリとは二年前に別れたのだ。そして、僕は今サオリと昔の思い出話をしているような場合ではないのだ。僕は三杯目のウイスキーを飲み干してから、思い切ってサオリに尋ねた。

「サオリ、コウジくんとはうまくいってるのか？」

「ええ……実は私、コウジと結婚することにしたの。いつになるかわからないけど」

「そうなんだ。おめでとう……なあ、ひとつ聞いてもいいか？」

「何？」

「二年前、俺に手紙くれたよな。イルカのネックレスと一緒に……俺、正直あの時とてもショックだった。何故？ どうして……何度も自分に問いかけた。サオリに電話しようとも思った。でもやめた。ずっと前にサオリが言った言葉を思い出したんだ。人の気持ちって強いけど儂いものなんじゃないかっていう言葉……そうなんだろうなって思った。そんなもんなんだろうなって。サオリ、今さら聞いても仕方ないんだけど、二年前は俺よりもコウジくんのほうが好きだったのか？」

僕のこの問いかけに、サオリはしばらくうつむいたまま答えなかった。でも、僕は我慢強く次の言葉を待った。どれくらいの時間が経つたろうか、サオリが静かに口を開いた。

「うまく言えないんだけど、元々ヒロとは幼なじみだったし、気心も知れてたし、根っこの部分で繋がっていたような気がするの。それが三年前に付き合うことになって、いろいろな所に行って、いろいろな話をしてすごく分かり合えたし、幸せだったし、このままずっといたいって思った。でも、ある時からあまり会えなくなって、寂しくて、でも少し離れてみているいろいろなことを考えるようになったの。するとね、ただ一緒にいて幸せで、それだけじゃいけないんじゃないかって……本当にうまく言えないんだけど、そんな風に考えて、ふとヒロを見た時、ああ、私この人に何かしてあげられるのかなって……でも結局何もしてあげられないまま、辛そうなヒロをひたすらに見続けるようになって、そういう自分にも耐えられなくて……ごめんなさい、本当にうまく言えてないね。ヒロとコウジとどっちが好きって言うんじゃないかって、ヒロとの場合は、もっと根っこの部分で分かり合いたかったの。そして、それは男と女という関係とは違うっていうことだと思ったから、友達に……なんて手紙に

書いちゃったけど、ごめんなさい」

「謝ることはないよ……わかった、もうよそう。でも驚いたな。まさかメグミちゃんがサオリを連れてくるなんて、本当にびっくりしたよ」

「メグミと私、短大のクラスメートなの。メグミから話を聞いた時、私、ひよっとしたらヒロに会えるんじゃないかと思って、コウジのことは隠して来てみたの。でも、まさか本当にヒロがいるなんてね。私もびっくりしたわ」

「実は俺、今ユキと付き合ってるんだ。この前偶然に会って、それでまたやり直そうってことになって」

「そう、よかつたじゃない。ヒロとユキさんならお似合いね」

「よし、今日はじゃんじゃん飲もう」

「そうね。でも酔っ払ったら介抱してね」

「ああ、その辺に横にして置いてくよ」

「それ、すっごいムカツク！」

僕とサオリはそうして長い間飲み続けた。でも僕は、これでサオリと会うのは最後にしようと思った。サオリとのことは、いずれにしても既に過去のことだった。一度進んでしまった時の流れは、もう元には戻らない……セピア色の思い出は、セピア色のままが一番美しいのだ。僕は、目の前にあるウイスキーの氷が溶けていくのを見ながらふとそんなことを感じていた。

僕とサオリはそうして夜遅くまで飲み続け、そして別れた。サオリはまだ鎌倉に住んでいたの、僕らは駅からそれぞれ反対方向の電車に乗った。ああ、これでサオリと会うのも最後なんだ……僕は一抹の寂しさを振り払うように頭を左右に振った。そうしたことのでかえって酔いは回ったが、逆に気持ちのほうはすっきりした。僕は今過去を振り切り、前へ向かってゆっくりと歩き出そうとしていた。

次の日、僕が会社の売店で缶コーヒーを買っていると、横から急にメグミが顔を出してきた。

「あつ、マツダさんもその缶コーヒー買ったんですか？ 私も買ったんです。これ、結構美味しいですよね？」

「俺も結構気に入ってるんだ……あつ、そうそう、昨日はごめんね。何か急に気分悪くなっちゃったんで、メグミちゃんに声かけてから帰ろうと思ったんだけど、見失っちゃってさ」

「いいんですよ。二次会のカラオケ盛り上がって、とても面白かったですよ。それにスズキさんとヒトミ、結構いい雰囲気だったし」

「ヒトミって、メグミちゃんの同期の……へえ、あの二人うまかったですんだ」

「ええ、帰る時なんかスズキさんが、ヒトミは俺が送るからとか言って、さっさとタクシー乗って二人で帰っちゃいましたよ」

「そう、でもうまかったですよ」

「そうですね。でも羨ましいなあ、ヒトミ。スズキさんみたいな人とうまくいって」

「メグミちゃんは、彼氏いないの？」

「え、ええ。好きな人はいるんですけどなかなか……あつ、そう言えば、昨日サオリモ途中で消えちゃったんですよ。マツダさん、知ってます？」

「あ、いや知らないけど、いなくなっちゃったんだ」

「ええ、まあ後で電話してみますけど……マツダさん、また飲みに行きましょうね」

メグミはそう言つと、売店を後に足早に去っていった。僕はサオリとのことをメグミに話そうかとも思ったが、いずれにしても既に終わったことなのでこのまま言わないことにした。僕は、缶コーヒーをその場で一気に飲み干してからゆっくりと職場に戻った。

そうして四月は足早に過ぎ去り、街は新緑の五月を迎えた。通りの街路樹の葉はその緑を一層鮮やかにし、煌く日差しには本格的な春の匂いがした。道行く人の表情は活き活きとしていて、街は確かに息づいているように感じられた。そんなゴールデンウィークの真っ只中のある日、僕はユキとドライブに出かけた。東京湾を横切り国道を南下すると、やがて目の前に光り輝く海が広がった。海は僕に、そう遠くない夏の足音を感じさせた。そして助手席で楽しそうに笑うユキに、僕は確かな愛の形を見ていた。そうしてしばらく車を走らせると、目の前に灯台が見えたので僕は駐車場に車を止め、灯台まで二人で並んで歩いた。僕らは二人で肩を寄せ合い、花たちが見つめる中をゆっくりと進んだ。空は見渡す限り一面に真っ青で、雲のかけらも見えなかった。やがて目の前には、真っ白な灯台がその姿をあらわにした。僕らは灯台の下を横切ると海の見える場所に歩を進め、近くにあったベンチに並んで座った。海を渡る潮風が肌に心地よく、ユキは風になびく髪をかき上げながらじっと海を見ていた。

「風が気持ちいいわ……ねえ、海を見るとどうして気持ちが安らぐのかしら？ 本当に心が落ち着くのよ」

「そうだな、どうしてだろう？ きつと広いからかな？ ただただ広くて、俺たちを包み込んでくれるような気がして……だから落ち着くんじゃないかな」

「そうね。でも、今私の気持ちが安らぐのは海のせいだけじゃないの……大好きな人とこうして一緒にいるから」

「俺もだよ。本当に……久しぶりなんだ。こんなに気分がいいのは、やっぱりユキのおかげかな？」

僕は顔を赤くしてうつむくユキをそつと抱き寄せ、ゆっくりとその唇に触れた。それは本当に自然で当たり前の口づけだった。そう、僕らの間にはもはや言葉さえもいらなかった。唇が、そして体が反射的にその心を表現し、僕らは時の流れを忘れるほどに抱き合った。

どれくらい時間が過ぎただろう、突然に携帯の着信音が鳴ったので、僕はユキからゆっくりと体を外すと、ポケットから携帯を取り出して電話に出た。

「もしもし……」

僕は、その電話の声为谁なのかよくわからなかった。電話の声と海風が交錯してとても聞き取りにくかった。でも次の瞬間、僕はそれが誰であるかがはっきりとわかった。

「もしもし、サオリか？」

「うん」

僕は反射的にユキのそばから離れ、少し自分を落ち着かせてから会話を続けた。

「どうした？ 急に電話なんかかけてきたりして」

「ちよつとヒロの声が聞きたくなくて……あつ、この間はどうしても楽しかった。また行こうね」

「ごめん、今ちよつと手が離せなくて。急用じゃないんだったら、また後でな」

「ちよつと待つて。実は、ヒロに相談したいことがあるの。今度会つて話したいんだけど」

「もう会えないよ……これから会つのはよそうよ」

「どうして？ 昔からの仲じゃない。何で会えないの？」

「俺たちは、もう別々の道を歩み始めたんだよ。この間は偶然に会つて、久しぶりだったからいろいろ話したけど、結局もう昔には戻れないんだよ」

「友達には戻れないっていうこと？」

「だからもうお互いに、電話したり会つたりするのはよそう」

それから随分長い間沈黙があった。いや、長いと思ったのは時間の感じ方のせいで、本当は短かったのかもしれないが、とにかくその時の僕にはとても長く感じられた。

「わかった。いろいろごめんね……じゃあね」

電話はそうして切れた。僕はこの後味の悪さに少し気分が塞いだ

が、何とかそれを立て直してユキのところに戻った。

「誰から？」

「ああ、会社の同期のスズキから。今日飲みに行かないかって。まあ、断ったけどな」

「ふうん」

「さて、昼飯にしようぜ。ユキのお弁当楽しみにしてたんだ」

「今日は特製のサンドイッチよ。他にもいろいろ作ってきたから、たくさん食べてね」

「もう、じゃんじゃん食っちゃうよ」

僕とユキはそうしてそこで昼飯を食べ、しばらくゆっくりしてから帰途についた。僕は帰りの車の中で、静かに寝息を立てているユキの横顔を見ながら、これでいいんだとひたすらに自分を納得させていた。再びサオリと会うようになれば、またどうなるかわからない。いくら気持ちの整理がついていても、僕の心の弱さからまた気が揺れ動かないとも限らない。そう、僕はもうユキを離れたくない。たとえ何があっても、僕はもう二度とユキと離れるわけにはいかないのだ。夕日に煌く海岸線を見ながら、僕はサオリとの別れを、そしてユキとの永遠の幸せを固く決意していた。

やがて六月になり、ハルカの結婚式の日がやってきた。梅雨の真っ只中ではあったが、その日はすっきりとした青空が広がり、僕とユキは式が行われる教会に足を運んだ。そこは横浜の山の手にある小ぢんまりとした教会で、結婚式は身内と親しい友人たちだけで行われた。ウェディングドレスを身にまとったハルカは本当に幸せそうで、僕とユキがおめでとうと声をかけると、ハルカはにっこりと微笑んでありがとうと言った。僕はハルカのそんな姿に改めて人の幸せを感じ、そしてそれを見つめるユキの姿に僕自身の幸せを感じていた。

そうして式は無事に終わったので、僕とユキは海沿いの公園まで歩き、そこから栈橋で繋がっている、海の上に浮かぶレストランでコーヒーを飲んだ。海は今日も静かに凪いでいて、僕は海にかかる橋を窓の外に見ながら久しぶりに穏やかな気持ちになっていた。

「ねえ、ハルカ綺麗だったわね」

「そうだな」

「それに、とても幸せそうだった」

「ああ、眩しかったよ」

「私たちも、あんな風になりたいわね」

「なれるさ。いや、もっと幸せになろう」

「そうね……幸せになろうね」

僕は、そう言ってこちらを見つめるユキの額に軽く口づけた。ユキは恥ずかしそうに下を向いたが、僕はその姿に確かな愛の形を見ている。そう、その時僕は初めてユキとの結婚を意識し、ユキとずっと一緒にいられたらどんなに素晴らしいだろうと思った。六月の海は、そんな僕らと僕の気持ちを祝福するかのように、日差しを浴びてきらきらと輝いていた。

そうして僕らは、お互いの愛を確かめ合いながらより強く結ばれ

ていった。ユキは僕にとつてもはやかけがえのない存在になっていて、彼女のいない人生など考えられなくなっていた。僕らの心は一つになり、お互いの心を共有し合っていた。と同時に、それは僕にとつてサオリが完全に過去の存在になったことをも意味していた。確かに、眠れない夜にサオリのことを思い出して胸が痛む時もあったが、それはほろ苦い青春の思い出を回想するのと同じで、それでサオリへの想いが再び生まれてくるわけでもなかった。僕は、自分の人生に新しい一ページが刻まれたことを強く実感していた。

七月を迎えると、街は夏の日差しに包まれるようになった。僕は、会社のプロジェクトの関係でメグミと一緒にある会議に出席した後、近くのオープンカフェでアイスコーヒーを飲んだ。道行く人々は、みんなうだるような暑さに顔をしかめながら、それでも早足で歩き去っていった。

「今日も暑いですね」

「そうだな、本当にゆでだこになっちゃいそうだよ」

「本当に……それにしてもマツダさん、最近仕事頑張ってますね。」

何か力がみなぎってる感じで、エネルギーシユですごいと思います」

「そうかな？」

「ええ、少なくとも私には真似できないな。今日も私、邪魔じゃなかったですか？」

「そんなことないさ。メグミちゃんが会議の資料をきちんとまとめておいてくれたから、先方の感触もずいぶんよかつたし、本当に感謝してるよ」

「本当ですか？ よかつた。私、マツダさんの役に立ただけで嬉しいです。だつて私……」

「えっ？」

「いえ、何でもありません。ところでマツダさんは、夏休みとかどこかへ行くんですか？」

「ああ、ちよつと南の島へでも行くこうかと思つて」

「いいですね。私も行きたいな、南の島」

そう言つとメグミは、高い空を見上げて大きく背伸びをした。僕はそんなメグミの姿を微笑ましく見ながらも、そのかすかな想いをどう受けとめたらいいか迷っていた。でも結局のところ、僕はメグミの気持ちには応えられないのだ。僕の心の眼には、もうユキしか映らないのだから……。

その半月後、僕とユキは夏休みを利用して南の島へと旅立った。

出発の日の朝、東京は久々の雨に街中がしつとりと濡れていたが、飛行機を乗り継いで島に降り立つと、強い、でも優しい日差しと、爽やかに通り過ぎる風が僕らを出迎えてくれた。僕らはまずタクシーでホテルへ向かい、部屋で着替えを済ますと、ホテルの裏手にある真っ白な砂浜が眩しいビーチへ出た。空はどこまでも青く、僕らはそのままの姿で海に入り、お互いに水しぶきをかけ合ってはしゃいだ。煌く水しぶきの向こうには、それに負けないくらいに輝くユキの姿があり、僕はその姿に目を細めながら、たとえようのない充足感に心が満たされていた。

そうしてひとしきりはしゃいだ後、僕らは穏やかな波の音をバツクに砂浜に横たわった。遠くからはささやくように風の歌声が響き、照りつける太陽は温かく僕らを包んでくれた。僕はそんな太陽を眩しく見つめながら、同時に横で寝ているユキをも眩しく見つめていた。

「いい気持ちね……本当に、いい気分」

「そうだな、海も綺麗だし……でも、ユキもとても綺麗だよ」

「もう、何言ってるのよ」

「本当さ」

僕はその時、ユキのことを本当に美しいと思い、またいとおしいとも思った。そして僕はこの幸せを、この胸の想いを失いたくないという強い衝動に駆られた。遠く海の彼方に漂う一艘のボートを見ながら、僕はそんな風にこの夏を抱き締めていた。

その夜、僕とユキはホテルの中にあるレストランで夕飯を食べた。そこは東南アジア風にアレンジされていて、コース料理のメニューにもトムヤンクンやカレーなどが並び、僕らは改めて南の島に来た

ことを実感した。僕とユキはまずビールを注文し、軽くそのグラスを合わせた。キンという澄んだ音が静かな店内に心地よく響いた。「とてもいい雰囲気ね。何かこう南国っぽくて、うまく言えないけど、ああ、旅に来たんだなって実感するわ」

「そうだな。余計なものとかがないし、落ち着くよ」

確かに店内は窓もなく開放的で、目の前にはホテルの中庭が広がり、ラグーンには鳥たちがひっそりと佇んでいた。既に外は暗かったが、テーブルのキャンドルが僕とユキの姿をほのかに映し出していた。

やがて前菜からトムヤンクン、肉と魚それぞれのカレーなどが運ばれてきて、食べ終わってコーヒーを飲む頃には二人とも十分に満足していた。

「とっても美味しかったわ。普段食べてるカレーなんかとは全然違うし、でもトムヤンクンは辛かったわ。おかげでビールもたくさん飲んじゃったし……でも幸せ」

「普段食べてるカレーって、レトルトパックのやつ？」

「失礼ね。これでも料理には自信あるんだから。カレーだって、きちんとルーから作るんだから」

「へえ、実は俺も、料理にはちよつと自信ありなんだ。そうだ、今度どっちのカレーがうまいか対決しよう」

「ええ、いいわよ。でも、二人で作ってお互いに食べ合うのも何かね」

「じゃあ、ハルカを呼ぼうよ。ハルカに俺たちのカレーを食べてもらってさ、どっちがうまいか決めてもらおうぜ」

「ふふつ、何か、どこかのテレビ番組みたいね」

僕らはそんな風に夕食をとり、やがて話し疲れたところで部屋へと戻った。部屋からは昼間泳いだ砂浜と海がうつすらと見えた。僕が部屋の明かりをつけようとすると、ユキはそれをおもむろに止めた。

「だって、明かりつけないほうがムードがあっていいじゃない。海

のほうが少し明るいから真っ暗じゃないし」

「それもそうだな……何か飲もうか？」

僕は、ルームサービスでウイスキーとカクテルを注文した。そして、海からのほのかな明かりのもとで僕は静かに乾杯した。ユキのカクテルグラスの向こうに、穏やかに佇む海が見え、その波の音は僕らを夢の世界へと誘った。

「何かこの世界に私たちがしかない感じね。静かで……本当に素敵だわ」

「本当に、俺たちだけしかいなかったらどうなのかな？」

「結構いいかもよ。ほら、二人だけで無人島に置き去りにされたみたいで……どこかの映画にあったような気がするけど」

「それで、魚や草を取って食べながらひたすらに助けを待つわけだ」

「助けなんかいらさないわよ。ずっと無人島にいればいいじゃない」

誰にも邪魔されないし余計なこと考えなくてもいいし」

「そうだな、それもいいな」

「ねえ、ここを無人島にしましょうよ。二人しかない無人島に……」

……

そう言うとユキは僕の隣に座り、そつと僕の肩にもたれてきた。

僕はユキの唇に自分の唇を深く重ね合わせ、そのまま二人だけの夢の世界へと向かった。お互いが溶け合っていくような無人島の夜は、そうしていつまでも果てしなく続いた。

次の日もまた次の日も、僕とユキは二人だけの時間を過ごし続けた。僕は本当に夢の中にいるようで、ただひたすらにユキを求め続け、そして愛し続けた。ユキもまた、そんな僕の気持ちに応えてくれる、いやそれ以上に深く激しく僕を愛してくれた。僕らはそんな無人島の生活に、これまでにないほどの最高の幸せを感じていた。そう、この世界は僕とユキのためだけにある永遠の世界なのだ。

でも、そんな風に永遠に続くように思えた無人島の生活にも終焉の 때가 やって来た。予定していた一週間は瞬く間に過ぎ、僕らは飛行機で自動的に日本に戻った。成田に着いた僕らは本当に無人島から帰ってきたような感じを受け、そこから自力で戻ってきた自分たちには本当にうんざりした。ユキが疲れていたのも僕は彼女をマンションまで送り、それから自分の部屋へ帰ってくると、郵便受けに通の手紙が入っていた。宛先は僕の実家になっていて、おそらく僕の親がそうしたのだろう、宛先が書き換えられていた。僕がその手紙を裏に返すと、そこには見覚えのある差出人の名前が書かれていた。

そう、それはサオリからの手紙だった。僕はカギを開けて部屋に入ると、旅行の荷物を放り出し、ベッドに座ってその封を開けた。

ヒロへ

久しぶり……確かヒロに手紙を出すのは二度目だね。お元気ですか？ 突然の手紙、迷惑だよ。でも私、もうどうしていいかわからなくて、頼れるのヒロしかいなくて、それで迷惑を承知で手紙を出しました。五月に電話しちゃったこと、ごめんなさい。四月に久しぶりに会って、二人で楽しく飲んで、またヒロといるいろいろなことが話せるのになって勝手に思っ、つい気楽に電話しちゃいました。そうだよ、ヒロにはもうユキさんっていう恋人がいるんだし、いくら友達って言っても、私たち前に付き合っていたんだもんね。しかも、ヒロが前にユキさんと別れた原因だって私にあるわけだし……そう都合よくいかないよね。あの電話の後、すごく反省しました。だから、もう連絡取ったり会ったりするのは止めようって思ったのでも、私どうしていいかわからなくて、相談できるのヒロぐらいしかいないから……実は私、コウジと別れたの。コウジ、他に好きな

女の子ができたらしくて、会社の同僚みたいんだけど、この間も
うお前とはやっていけないって言われて、最初のうちは何がなんだ
かわからなくて、泣くこともできなかった。だって、私たち二年以
上付き合っ、結婚の約束までして、二人の世界が壊れるなんて本
当に想像もしていなかったの。でも今になって、ああ別れちゃった
んだなあって痛感して、それでどうしようもなく寂しくなって、虚
しくなって……ごめんね、こんなこと言われたってヒロは困っちゃ
うよね。でも、どうしようもないの……だから、できたら会って話
がしたいなって思いました。返事待ってます。それでは、さような
ら。

手紙はそうして終わっていた。僕はもう一度ゆっくりと読み返し、
それからベッドに横になってぼんやりと天井を見つめた。サオリが
コウジと別れた……その事実はまだにも唐突で、僕にはうまく理
解できなかった。と同時に、思い出の彼方にあつたサオリのことが
再び目の前を過ぎり、一瞬ではあつたがどうしようもなく切ない気
持ちになった。でも僕は、サオリと会うわけにはいかなかった。も
う二度と同じ過ちを繰り返さないために……。

それからしばらくして、僕は会社のプロジェクトの打ち上げで、
メグミを含めた同僚たちと飲む機会をもった。プロジェクトは細か
いミスはあつたものの無事に終了し、僕は久しぶりに仕事を終えた
充実感と満足感で気持ちよく酒を飲んだ。

「でもマツダさん、プロジェクトが無事に終わって本当によかった
ですね」

気がつく、隣には少し酔ったらしく、頬を少し赤くしたメグミ
が座っていた。

「ああ、メグミちゃんもよく頑張ってくれたね。本当に感謝してる
よ」

「お礼なんて、マツダさんのためだもの。私いくらでも頑張ります。

だつて私……」

「えっ？」

「いえ、何でもありません。それよりマツダさん、覚えてます？

四月にやった飲み会の時に来てた、私の短大時代のクラスメートのサオリ」

「ああ、何となくは」

「あの子、本当は彼氏がいたみたいなんですけど、最近別れたみたいですが、すごく落ち込んでるんです。私も何度も電話したりしてるんですけど、やっぱり元氣なくて……結婚の約束までしてみたいだから相当シヨックみたいで」

「そうなんだ」

「あの、もしよかったら、私と一緒にサオリを励ましてもらえませんか？」

「励ますって言ったって……」

「別に特別なことはしなくてもいいんです。ただお酒でも飲んで、みんなではあつと騒いだら、少しは気が晴れるかなつて。スズキさんやヒトミも呼んで、前のメンバーでやれたらなつて……駄目ですか？」

「そうだな。確かにみんな楽しくやれば、彼女の気も紛れるかな」

「ありがとうございます。じゃあ、さっそくセッティングしますね」

思いも寄らないこの展開に、正直僕は運命のルーレットを回された感じを受けたが、かといって断るのも変だったので、心ならずもメグミの提案を受け入れることにした。今の僕なら、今の僕の気持ちなら、たとえサオリに会ったとしても心の揺れはないだろうと、自分自身に理由のない自信を持っていたからでもあった。でもそのことが、僕自身を決定的に損ねることになるうとは、その時の僕には知る由もなかった。

そして一週間ほど経った金曜日、会社が終わると、僕はスズキと後輩を連れて四月に飲み会をしたビアレストランへ向かった。メグミが、同じ場所でもいいですねと言ってそこを予約していたのだ。店内に入るとこの前と同様の喧騒が支配していたが、今度はメグミたちを容易に探すことができた。メグミが、入口からよく見えるテーブルを予約しておいたからだ。僕はメグミたちと軽く挨拶を交わすと、あてがわれたテーブルの席についた。僕の目の前には少しやつれ気味に見えるサオリが、それでも周りに笑顔を見せて座っていた。僕はそんなサオリの姿に、かつての元気だった姿とは別の女性を見ているような気がして少し哀しい気持ちになった。

やがて飲み物が揃ったところで、僕ら六人は以前と同じように乾杯した。僕はサオリを励まそうと、いつも以上に高いテンションでいろいろな話をして盛り上がった。特にメグミは、終始サオリを気遣いながら、それでも楽しそうに振舞っていて、僕はそんな姿に少なからず感動を覚えていた。サオリも、本心は別にしても結構楽しそうに話していたので、僕はほっとしながら、それでも懸命にその場を盛り上げた。

そんな風にして二時間ほどが過ぎ、お決まりのようにカラオケに行こうということになり僕らは外に出た。僕は、今日は最後まで付き合っつてサオリを励まそうと決めていたので、みんなと一緒にカラオケボックスに行き、歌を歌いながら盛り上がった。サオリは自分から歌おうとはしなかったが、それでもみんなの歌を聞いて楽しそうに笑ったりしていた。僕はそんなサオリの姿を横目で見ながら、メグミと一緒に笑える曲や明るい曲を意識的に選んで歌い、そして騒いだ。みんながそれぞれに、サオリのためにこの場を作り上げていることを肌で感じ、僕は今日の飲み会をやって本当によかったと思った。そして今日集まったこのメンバーに対して、深い感謝の気

持ちで一杯になった。

そうして時間が瞬く間に流れ、僕らは店の前で解散した。スズキはヒトミとタクシーで帰り、後輩は……名前はホンダというのだがメグミと意気投合したようで、二人で次の店に行くと言って去っていった。僕はサオリと二人で駅へ向かって歩き出したが、二人の間に会話はなく、僕も何を言ったらいいのかわからなくなり、そのままの沈黙が流れる中ゆっくりと歩を進めた。そして駅近くの歩道橋まで来た時、前を歩いていたサオリが急にこちらを向いて話してきた。

「今日はありがとう。久しぶりに楽しかったわ。みんな優しいし……また飲もうね」

「手紙読んだよ。ごめん……俺はもう、サオリには何もしてあげられない。今日もメグミちゃんからみんな飲もうって言われて、手紙のこともあったから来たけれど、やっぱり俺、サオリとは会うわけにはいかないんだ……ごめんな」

「そんな風に謝らないで。余計に哀しくなるから……わかってるの、ヒロに頼っちゃいけないって。でも駄目なの。もう、心を支えていたものがなくなっちゃって、どうしたらいいかわからないの。今だって、もしヒロがいてくれなかったら、私ここから飛び降りちゃうかも」

「サオリ!」

「大丈夫よ。でも私って本当に馬鹿ね。どうしてあの時、ヒロと別れちゃったんだろう。どうして……ねえ、私たちやり直せないのかな?」

「サオリ」

「ヒロ……」

サオリはそうして、泣きながら僕の胸に飛び込んできた。僕はしばらくの間、サオリを抱き締めていいものかどうか迷っていたが、いつしかその温かい体をしっかりと受け止めていた。そう、それは本当に無意識の行為であり、僕はその時サオリに対して深く同情し

ていた。いや、同情の他に一片の愛情があったこともまた事実だったが、その種類はユキへのものとは明らかに異なっていた。むしろそれは、切ない慕情とでもいうべきものだった。

僕らはそうしてしばらく抱き合っていたが、やがて空から雨粒が落ちてきていることに気づき、走って駅へと向かった。でも最終電車は既に出てしまっていて、僕らは雨で体を濡らしたままその場に佇むことになった。

「参ったな、終電出ちゃってるよ」

「そうね」

「サオリ……どうした？」

「ううん、ちょっとぼおつとしちゃって」

サオリの顔が少し赤らんでいるように見えたので、もしかやと思いが僕がその額に手をやると、普通ではない熱さが伝わってきた。サオリに熱があることは明らかで、僕は取りあえず寝かせる場所を探そうと駅の周りを見渡したが、ラブホテルくらいしか見当たらなかった。僕はさすがに躊躇したが、サオリをこのままにしておくわけにもいかず、その体を抱えるようにしてホテルに入った。部屋に入った僕は、まずサオリをベッドに寝かせ、タオルを水で濡らしてからその額に載せた。

「ごめんね」

「何言ってるんだよ。俺のことはいいから、ゆっくり寝てろよ」

サオリは小さく頷くと、ゆっくりとその目を閉じた。僕はこまめに額のタオルを換えながら、ただサオリの熱が下がるように祈り続けた。

どれだけの時間が過ぎたのだろう、僕が目を覚ますと、窓のカーテンの隙間から日の光が差してきていた。どうやらそのまま寝てしまい朝になったらしかった。僕は、ゆっくりと目を上げてサオリの顔を眺めた。夕べの顔とは異なり、サオリの熱は明らかに引いているようだった。僕は念のため額のタオルを換えた後、自分でも顔を洗った。鏡の向こうにいる自分は相当ひどい顔をしていた。僕は静

かに首を横に振った後、しばらく鏡の向こうの自分と見つめ合ってからベッドへ戻った。サオリは既に目を開けていて、僕の姿を見るとゆっくりと起き上がった。

「まだ、寝てなきや駄目だよ」

「ううん、もう平気。熱も下がったみたいだし……それより、ありがとう。一晩中看病してくれたのね」

「俺も途中で寝ちゃったから。でも熱が下がってよかった。しばらく休んだら帰ろう。一人で家まで帰れる？」

「うん、もう大丈夫。でも本当に、ヒロには迷惑かけちゃって、本当にごめんね」

「困ったときはお互い様だろ。きっと疲れていたんだよ」

「相変わらず優しいね」

それからしばらくして、僕らはそのラブホテルを出て駅へと向かった。僕はサオリが電車に乗るのを見届けてから、反対側のホームで自分の乗る電車を待った。昨日の夜から今までのことが、記憶の洪水となって僕に押し寄せていた。俺は一体何をしているんだろう……僕は繰り返し自分にそう問いかけながら、土曜日の朝にこうしていることを必死に理解しようとしていた。ホームに差し込む太陽の光は、来るべき秋の到来を予感させるかのように柔らかかった。

僕は自分の部屋に戻ると、そのままベッドに横になり、昨日のサオリとのやりとりを思い出していた。サオリの言葉が、僕の頭の中を何度も駆け巡った。少し前の僕だったら、そのままの流れに任せてサオリとやり直すこともあったろう。でも、今の僕にはユキがいる……もうユキとは離れたくなかった。今度こそ僕はユキのことを愛し抜き、そして守り抜かなければならなかった。今の僕にとって一番大切なものは、間違いなくユキ一人なのだ。

ふと気がつくと、頭の奥のほうから僕を呼んでいる声があった。始めのうちはその声が何なのかわからなかったが、次第にそれが声ではなく音であることに気づき、さらにそれが携帯の着信音であるこ

とがわかった時には、僕はもうはつきりと目が覚めていた。どうやら考えごとをしている間に眠ってしまったらしかった。僕はベッドからゆっくりと起き上がると、枕もとに置いてあった携帯に出た。

「もしもし」

「私、サオリ。夕べはごめんね。疲れたでしょ？ 本当に、何て言ったらいいか……でもありがとう」

「気にするなよ。それより具合はどう？」

「うん、今まで寝てただけけど、もう大丈夫みたい。熱も下がってるし」

「そうか、でもまだ寝ていたほうがいいぜ」

「うん、そうする……ねえ、昨日私が言ったことだけど、気にしないでね」

「あ、ああ」

「私、熱のせいで頭がぼおつとしてたから、変なこと言っちゃったかもしれないけど、もう大丈夫だから。一人でやっていけるから。ごめんね、いろいろ迷惑かけちゃって」

「そうか、俺はもう何もしてあげられないけど頑張れよ。そのうち、きつといいことがあるから」

「うん、ヒロも元気だね……じゃあね」

電話はそうして切れた。僕は割り切れない一抹の寂しさを胸に抱きはしたが、いずれにしても別々の道を歩き始めた二人が再び交わることがないことを改めて感じた。ふと窓の外を見ると、あたりは既に真っ暗で鈴虫が羽を震わす音だけが静かに鳴り響いていた。

そして月曜日、僕がいつものように会社の売店で缶コーヒーを買っている、メグミが急に後ろから話しかけてきた。

「あつ、またそのコーヒーですね。私もそれにしようつと」

「あつ、金曜日はお疲れさま」

「すみませんでした。私、サオリのことをマツダさんに押し付けて、ホンダさんと飲みに行っちゃって」

「気にしないでいいんだよ。それで、ホンダとは盛り上がった？」

「はい。ホンダさん、とても面白くて、私ずっと笑いつばなしでした」

「じゃあ、うまくいったってわけだ」

「ええ、でも友達としてはいいけど、恋人となるとちよつと……」

「あつそうか、メグミちゃん、確か好きな人いるんだよね」

「え、ええ、まあ……あつ、それよりサオリどうでした？」

「うん、実はさ、帰りに雨が降り出したんだけど、サオリちゃん熱があつて、ちよつと帰れそうになかったから、駅前のホテルに泊まって寝かせておいたんだ。あつ、もちろん看病してたんだから、変なことはしてないぜ」

「わかってますよ。マツダさんがそんなことしない人だって……でも、そうだったんですか。確かに元気なかつたけど、彼と別れたことが原因なのかなつて思ってたんですけど、熱があつたんですね」

「でも、朝になったら熱も下がったみたいだし、一人で電車で帰ったからもう大丈夫だと思うよ」

「そうですか。でも今夜、一応電話してみます」

「そうだね、それがいいよ」

「マツダさん、本当にありがとうございました。いろいろ盛り上げてもらって、拳句の果てにサオリの病気の看病までしてもらって……本当にマツダさんって優しいですね。じゃあ失礼します」

そう言うとメグミは、その場を足早に去っていった。さすがにラブホテルに泊まったとは言えなかったが、メグミに金曜日の夜のことを話せたことで、何となく僕の胸のつかえが取れたような気がした。もちろん、サオリとの間に後ろめたいことはなかったのだが、他の誰にも話さないでいると、それがどことなく秘密めいたことのように感じられたからだ。

その週末、僕は会社の近くの居酒屋でスズキと二人で飲んでいた。最近仕事が忙しかったせいもあって、メグミたちと一緒に飲むことはあっても二人で飲むことはなかったので、僕は久しぶりにいるいなことを語り合った。

「でもスズキ、ヒトミちゃんとうまくいってよかったな」

「ああ、お前とメグミちゃんのおかげだよ。お前たちがセツティングしてくれてなかったら、俺とヒトミは多分会うことはなかったかな。本当に感謝してるよ」

「でも最終的に頑張ったのはお前だからな。まあ、幸せになれよ」

「俺のことはともかく、お前のほうはどうなんだよ。お前の彼女…確かユキちゃんって言ったっけ、うまくいってるのか？」

「ああ、まあな」

「何だよ、随分歯切れが悪いじゃないか。さては喧嘩でもしたのか？」

「いや、ユキとはすごくうまくいってるんだけど」

僕はスズキにサオリのことを話した。学生の頃のことも含めて、洗いざらいを全て話した。

「そうか…まあ、俺は難しいことはよくわからないけど、お前は今、ユキちゃんのことを好きなんだろ？ 彼女を愛してるんだろ？

だったら彼女を大切にしていればよ。サオリちゃんのこととはもう忘れる。それが一番だ」

「もちろん、そのつもりだけど」

「そんなにうじうじするな。つまり、じゃなくて、ユキちゃんを大

切にしる。それでいいじゃないか。何も迷うことなんてないんだ」

「そうだな……よし、決めた。俺はユキを精一杯幸せにする」

「そうこなくつちゃ。よし、今夜はじゃんじゃん飲もう。明日は休みだからな」

それから、僕とスズキは終電がなくなるまで飲み続けた。僕はスズキと話したことで、あれこれと悩んでいる自分を捨てることのできた。そう、過去のことはどうあれ僕はユキと幸せになるんだ……気持ちよく酔っていく頭の中で、でも僕ははつきりとそのことを心に誓っていた。

やがて、流れゆく月日を誰も止めることができないうちに、十月の秋風が街を包むようになって。舗道には枯葉が舞い落ち、木枯らしが吹くと、その枯葉たちはまるで踊りを踊っているかのように、澄んだ空気の中を褐色の体で舞い続けていた。

そんな秋真只中のある土曜日の夜、僕とハルカはユキのマンションにいた。ユキとの夏の旅行で話した、僕とユキとのカレー対決をしようということになったのだ。ハルカはその審査員で、と言っただけは大袈裟だが、二人のカレーを食べてもらおうとユキが誘ったのだ。僕とユキはさっそくそれぞれのカレーを作り始めたが、当然のようにキッチンは一っしかなかく、僕らは何度もぶつかり合いながらカレー作りをする羽目になった。

「こうして後ろから見ると、本当に夫婦みたいね」

そうハルカにからかわれながらも、僕らは二時間をかけてやっと作り終え、それぞれのカレーがテーブルに並べられた。

「へえ、二人ともいい感じよ。まあ問題は味だけだね。さあ、さっそく食べましょうよ」

そう言うとハルカは、自分で差し入れたビールをみんなのグラスに注ぎ、乾杯もそこそこに僕らのカレーを食べ始めた。僕とユキはそんなハルカの食べっぷりに啞然としながらも、その表情に釘づけになっていた。

「……………」

ユキの問いにハルカはしばらく考え込んでいたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「びつくりした。見た目は二人ともちよつと違ってただけど、食べてみたら同じ味がする。不思議ね……………やっぱりあなたたちお似合いの夫婦ね」

「もう、まだ夫婦じゃないわよ」

ユキが笑いながら答えた。

「まあとにかく、二人とも食べてみてよ。本当に同じ味がするからハルカのこの言葉に、僕らは恐る恐るスプーンを動かした。ハルカの言うとおり、見た目こそ違っていたが、食べてみると僕のもユキのも同じ味がした。」

「本当だ……同じ味だ」

僕が思わずそう言っていると、ユキがすかさず答えた。

「ヒロ、私の真似したわね」

「何言ってるんだよ。それより、ユキこそ俺のカレーの味盗んだだろ？」

「盗んだって、ちょっとその言い方は何よ」

「まあまあ、二人とも落ち着いて。結婚する前から夫婦喧嘩してどうするのよ」

ハルカにそう窘められ、僕らはようやく口をつぐんだ。

「まあ、どっちが真似したかはさておき、このカレー、とても美味しかったわ。これは引き分けね。二人とも料理の才能あるわよ」

ハルカのこの一言で、僕らは何だか急に可笑しくなり、その後は三人で楽しく話をしながら過ごした。

やがて夜が更けてきたので、ハルカは楽しかったと言って帰っていった。僕とユキは二人で片付けをした後、リビングのソファでビールを飲みながらくつろいだ。

「今日は楽しかったな。ハルカもたくさんカレー食べてくれたし」

「……ええ」

「どうしたんだ？ さっきから顔色が悪いけど、具合でも悪いのか？」

「違うの……ねえヒロ、この前サオリさんに会ったんでしょ？」

「えっ……何で知ってるんだ？」

「ヒロが来る前、私ハルカといういろいろ話してたの。その時、ハルカが後輩のメグミちゃんっていう女の子から聞いた話をしたの。メグミちゃんとヒロが他の友達と一緒に飲んで、帰り際に調子の悪かつ

た女の子を一晚中ホテルで看病してたつていう話。メグミちゃん、ヒ口の優しさに感動したつて、それを聞いたハルカも感動したらしいけど、でもその子がサオリさんだつて聞いたら、私何だか辛くなつちやつて」

「ごめん。ユキには、サオリと会つたこと言つてなかつたよな。でも、本当に偶然だつたんだ。それに、帰り際に雨が降つてきて終電なくなつて、おまけに彼女熱あるし、どうしようもなくてホテルで看病してたんだ。本当に、何もしてないんだ」

「わかつてるわ。そういう状況なら仕方ないと思う。でも、相手がサオリさんだつてというのがどうしようもなくひっかかるの。ねえ、昔のことを思い出しちゃうのよ」

「そうだよな。確かに、俺が軽率だつた。本当に……ごめん」

「いいの……いいのよ。でも今日は帰つて」

「……わかつた」

僕はソファから立ち上がるとかけてあつた上着を取り、ゆつくりとユキの部屋を立ち去つた。理由はどうあれ、ユキを傷つけてしまったことは間違いなかつた。僕は本当に心の底から悔いていた。そして、その後悔している自分にも嫌気がさしていた。最初からメグミやサオリと飲みにさえ行かなければ……僕は、都会の夜空に輝く数少ない星たちを見ながらただ心の中でそう呟いていた。

それから一週間というもの、ユキからの連絡は全くなかった。僕はユキの携帯や部屋に何度も電話したが、ただの一度も繋がることはなかった。ユキの会社にも電話したが、休暇を取っているらしく話をすることができなかった。僕は次第に居たたまれなくなり、次の土曜日に思いきってユキのマンションを訪ねた。僕は何度も部屋のドアを叩いたが、ユキが出てくることはなかった。すると隣の部屋の人が出てきて、彼女は引越したとぼつりと呟いた。その唐突さは、僕に一瞬間の流れが止まってしまったかのような錯覚をもたらしめた。でも、時間は永久不変に流れていた。その緩やかな時間の流れの中で、彼女は……ユキは再び僕の目の前から姿を消してしまった。

僕はしばらくの間、ユキがいなくなってしまった事実にうまく馴染めなかった。このドアを開ければ、ユキが笑顔で僕を出迎えてくれるような気がしてならなかった。でも、少なくともユキは既にここにはいなかった。僕はそれでも何とか自分を取り戻すと、思い立ってハルカの携帯に電話をした。親友であるハルカなら、ユキの居場所を知っているかもしれないと思ったからだ。

「もしもし、ハルカか？ ユキの居場所知らないか？」

「もしもし、誰……マツダくん？ どうしたの、そんなに慌てて」

「今、ユキのマンションにいるんだけど、いなくなっちゃったんだ。引越してどこかへ行っちゃったんだ。ハルカ、知らないか？ ユキがどこへ行ったか……知らないか？」

「ちょっとマツダくん、落ち着いて。ユキがいないの？ とにかく、すぐにそっちへ行くから待っててよ。いいわね」

ハルカはそう言うと言った。僕はしばらく切れた携帯を耳にあてていたが、やがて電源を切るとユキの部屋のドアをじっと見つめた。何故……どうして？ 確かに理由はどうあれ、サオリとホ

テルで一晩過ごしたことは軽率だった。そして、それを黙っていたことも悪い。でも、だからと言ってどうして急にいなくなってしまうんだ……僕は二度と開くことのないドアに向かって、そうしてひたすらに語りかけていた。

どれだけ時間が経つたらう、ふと横を見ると、そこには息を切らして駆け寄ってきたハルカの姿があった。

「はあはあ……どうしたのよ？ 何がどうなってるの？ ユキ、いないの？」

「さっき隣の人が出てきて、ユキが引越したって」

「まさか……私、そんなこと聞いていないわよ」

「やっぱり、俺のせいなんだろうな」

「ねえ、何かあったの？」

僕はこの前の、三人でカレーを食べた夜のことを話した。ハルカは終始黙って僕の話聞いていた。そして僕が話し終わってからしばらく考えた後、ゆっくりと話し始めた。

「そうだったの……一晩中看病してた女の子って、サオリさんだけ？ マツダさんの前の彼女だったんだ。実は少し前に、私ユキに聞いたことがあったの。どうして昔、マツダさんと別れたのかってユキ、ある女の子のことをマツダくんが好きになったからだって言ってたっけ。その子がサオリさんだったんだ……ねえマツダくん、その夜のことは私も仕方ないと思うわ。でも少なくとも、ユキには正直に言うべきだったわね。それに、何年か前のこともあるみたいだし、ユキがサオリさんの名前を聞いて神経質になっていたのかもしれない……あの子、結構ナイーヴなところあるから。でも、それだけで引越しまでするかしら？ マツダくん、他に心当たりのないの？」

「いや、全然わからない」

「そう……とにかく、ユキも大人だし変なことは考えないだろうけど、とりあえず私、ユキの実家にそれとなく電話してみる。マツダくんも、ユキの居場所に心当たりがあったら調べてみて」

ハルカはそう言うと、急いで僕のもとを去っていった。ユキの居場所と言っても僕には皆目見当がつかなかったが、ここにいても仕方がないことは明らかなので、僕はとりあえずユキの部屋を後にした。

そして自分のマンションに戻り、部屋のドアを開けようとした時、そこに一通の手紙が差し込まれていた。僕はその手に取って眺めた。差出人は……ユキだった。僕は部屋に入るのも忘れて、その場で封を開けて読み始めた。

Dear Hiro

こうやって、ヒロに手紙を書くのは初めてだね。でも、もう面と向かって言えそうにないので手紙にしました。今私は、友達のマンションに転がり込んでいます。あなたから離れた場所で、一人になっっているいると考えたいから……突然引越しちゃってごめんない。でも私、もうあなたと顔を合わせるのが辛くて、あなたと顔を合わせたら、私何を言うかわからないし……この前、ハルカと三人でカレーを食べたあの夜、私あなたに聞いたわよね。サオリさんに会ったんでしょって。その前にハルカから話を聞いてたっていうのもあったんだけど、実は私、先月の土曜日の朝、あなたとサオリさんを見かけたの。私の会社があつた駅の近くにあつて、土曜日は出勤日だから、あの日も会社に向かって歩いてただけだけど、その途中でラブホテルからあなたとサオリさんが肩を抱き合っただけのを見てしまったの。私、一瞬体が凍りついたように動かなくなっちゃって、あなたたちが駅へ向かって歩いていくのをただ黙って見つめるしかなかった。その後、あなたと何回か会ったけど、私そのことを言い出せなくて……そんな時、ハルカから話を聞いて、ああ看病してたんだって一瞬は納得したんだけど、ラブホテルから楽しそうに、肩を抱き合いながら出てきた二人の姿が隣の奥から離れなくて、いろいろな昔のこととも思い出して、私もうとうとしていいかわからなくて……多分あなたは、サオリさんとは何もなかったんだと思う。そう信じたいんだけど信じられなくて、そういう自分も嫌にな

つて、耐えられなくなつて、それで思い切つて引越したの。自分の気持ちの整理もつきたいし、今あなたに会つても、私きつと嫌な女になるし……あなたのこと大好きだけど、しばらく考える時間をください。そしてそれでも二人の気持ち、私の気持ちが確かなものだったら、クリスマススイブの夜に昔よく行つた海辺の公園で待つてます。

では、再び会えることを祈つて……。

僕はその手紙を何回も読み返し、それから深く大きなため息をついた。そう、僕は今こそ生涯で最大の後悔をしていた。いや、それは後悔というありふれた言葉では表現できないほどに深い絶望感だった。理由はどうあれ、僕は一度ならず二度までもユキを傷つけてしまったのだ。自分の生涯の中で最も大切なものを……。

それからの僕の時間はその大部分を、いやほとんど全てをユキとのかことを考える時間に費やした。僕はもう二度と自分の気持ちが、そして行動さえもが揺れ動かないようにただユキのことだけを想い続けた。仕事も、ハルカやメグミの声さえ僕には届かなかった。正確に言えばその声は耳には届いていたのだが、頭の中で理解することができなかつた。いや、僕はあえてそれをしなかつたのだ。僕は秋の深まりと冬の到来をその心に感じることもなく、そうしてただひたすらにクリスマススイブを待ち続けた。

その日は朝から鉛色の曇が空一面に立ち込め、冬独特の寂寥感がその寒さとともに街全体を覆い尽くしていた。平日ではあったが、僕は会社を休んでユキとの待ち合わせ場所へ向かった。海辺の公園には人影もなく、僕は海を見つめる銅像の下に座り、ただぼんやりとその荒く波立つ姿を見ていた。今日、このクリスマススイブの日にユキがここに来る保証はどこにもなかったが、僕はユキを、いや自分自身の想いを信じて、今日一日をこの場所で過ごすことに決めていた。僕は何としてでもユキと会い、今の自分の気持ち伝えきりたかった。このありったけの想いを、ありったけの言葉で伝えたかった。たとえそれがユキの心に届かなかったとしても……いや、ユキの心に届かせる自信はあった。でも、肝心なのはユキ自身の気持ちのほうだった。彼女が本心から僕を想ってくれるかどうか、正直なところ僕には確信が持てなかった。もちろん、そうさせた責任は全て僕自身にあったのだが……僕は言い知れぬ不安と冬の寒さに苛まれながら、それでもただひたすらにユキを待った。

夕方になるとついに雪が舞い始め、僕はコートの襟を高くしながら、その雪の彼方にユキの姿を求め続けた。でも、ユキは一向にその姿を現すことがなかった。僕の不安は次第にその大きさを増していったが、それでも僕はただユキを信じて待った。それが僕の今までの行為に対する償いであるかのように……。

それは夜も十時を過ぎた頃だった。僕はあまりの寒さに耐えかねて銅像の下を離れ、公園から砂浜に降り立ち、波打ち際をゆっくりと歩いていた。雪は一向に止む気配を見せなかったが、かといって激しく降りしきることもなく、淡々と僕の目の前を過ぎり、コートの上の静かに舞い降りた。海は既に暗闇の中にその姿を隠して、かすかに白い波だけが僕の目に映っていた。そうして、僕が頭の上に降り積もった雪を払い視線を元に戻すと同時に、あたかも

覆い隠していたベールが剥されるかのように、眼前の雪の向こうにユキの姿が飛び込んできた。

「ユキ……」

「久しぶり……」

僕らはその言葉だけを交わすと、そのまま並んで海を眺めた。ユキは真っ白なコートを身にまとい、それは僕にたった今舞い降りてきたばかりの雪の妖精をイメージさせた。

「元気だったか？」

「ええ」

「俺、お前にいなくなられて、お前が俺にとってどれだけ大切かがよくわかったんだ。失くしたものの大切さが痛いほどにわかったんだ。もう離したくない。ずっと俺のそばに、俺と一緒にいてほしい」

「私も、ずっとあなたと一緒にいたい。あなたと一緒にいつまでも過ごしていたい。でも私、もうあなたのことが信じられないの。信じていんだけど駄目なの。私、今まであなたと付き合ってきたとて、も幸せだったし、本当に夢のような時間を過ごせたわ。でもずっと前から、多分あなたと初めて会った時から、あなたの中にある何か気がなつてたの。今思えば、それが原因でこうなつたのかもしれないんだけど」

「俺の中にある何かって」

「うまく言えないんだけど、それはあなたの中にある弱さというか、儂さだと思うの。普段はそれが優しさとなって私を温かく包んでくれるんだけど、いざとなった時にその弱さが表に出てくるの。そして、あなたの心が儂く移ろってしまっじゃないかってそう考えると、どうしようもなく不安になるの。だから、あなたがサオリさんと会って何もなかったことがわかっていても、心のどこかでひっかかるの。今思えば、あの時も、最初に別れた時もそうだったのかもしれない。その時はわからなかったけど」

「それは俺自身が一番感じてることなんだ。時々、いやいつも自分の弱さには本当に腹が立っていたんだ。昔からずっと……そして、

いつも後になってから悔いるんだ。ああすればよかった、こうすべきだったって。でも、もう後悔したくないんだ。お前を手放したくないんだ」

「私だつて、いつまでもあなたと一緒にいたい。あなたと離れたくないの。でも……やっぱり駄目なのよ」

「じゃあ、どうすればいい？ どうすれば、俺を信じられるんだ？」
僕のその問いかけに、ユキはしばらくうつむいたまま答えようとはしなかった。あるいは答えられなかったのかもしれないが、いずれにしてもそれはユキの問題であり、僕はユキからの言葉を我慢強く待つしかなかった。

「ねえ、このまま二人でどこかに行かない？ 二人だけの場所に、二人だけの永遠の世界に」

「それって……」

僕が最後まで言葉を続けないうちに、ユキはその場に靴を脱ぎ捨てると、そのままゆっくりと海に向かって歩いていった。

「ユキ、何するんだ！」

「二人だけの無人島に行くのよ。さあ、一緒に行きましょう」

ユキはそう僕を誘うと、次第に海原の中にその身を沈めていった。その姿に、そしてその光景に、僕は一瞬この世とは異なる別世界にいるような錯覚を覚えたが、次の瞬間我に返ると、ほとんど反射的にユキのもとへと走っていった。そう、僕はこれが最後のチャンスだと悟ったのだ。僕がユキと永遠の愛を貫き、そして僕自身が弱さや儂さから解放されるラストチャンスなのだ。僕はなおも前に進み続けるユキに追いつき、その手を取ると、まるで何かに引き込まれるように二人で海の中に分け入っていった。そう、これでいいんだ。これで僕らはひとつになれる、そして僕自身も強くなれると思いたいながら……そして二人の行き着く先には、もう誰にも邪魔されることのない、僕の弱ささえも邪魔することのできない永遠の世界があるのだ。

僕とユキは、そうして大海の彼方にある永遠の楽園に戯れる二匹

のイルカになる……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0270e/>

Dolphin Story

2010年10月8日14時25分発行